

比企谷八幡を追いかけて…

電柱人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

総武高校に入学した日代 白（ひしろ しろ）はとある男子を追いかけていた。

彼の名前は比企谷八幡、誰にも頼らず、いつも一人で行動している。そんな彼に興味をもった彼女とのストーリー

この話は入学式から始まります。

俺ガイルキャラは出てきますがいつになるかわかりません。

また、初めての投稿なので文章力がありません。

展開が嫌いな方などはブラウザバックをお願いします。

更新はなるべく早めに行いたいです。

趣味で書き始めたので全然展開を決め手おりません。

それでもよろしい方は読んでください。

目次

第1話	私は彼を追いかける	1
第2話	私は彼に近づく	8
第3話	彼の理由と彼の苦しみ	13
第4話	私は彼との会話を楽しむ	19
第5話	私と彼のテスト勉強 前編	25
第6話	私と彼のテスト勉強 後編	30
第7話	私と彼と雨	37
第8話	私と彼の夏休みへのカウントダウン	43
第9話	私と彼の夏休み 前編	49
第10話	私と彼の夏休み 中編	55
第11話	私と彼の夏休み 後編	66
第12話	私と彼の新たな始まり	80
第13話	私と彼の文化祭	89
第14話	私と彼の日常の一コマ	96
第15話	私と彼らのクリスマス 前編	103
第16話	私と彼らのクリスマス 中編	108
第17話	私と彼らのクリスマス 後編	114
第18話	私と彼の始まりの場所	127
第19話	私たちの新たな始まり	132

第1話 私は彼を追いかける

春、それは出会いであり、別れである。

そして、人はそれぞれ自分を成り立たせるために行動する季節だ。しかし、私の知っている男子の行動は一味違う。そんな彼に興味をもち、私は彼に近づいていく。

~~~~~

私、日代白（ひしろしろ）は総武高校の入学式にでていた。校長の長い話を聞いたり、生徒会長の話を聞いたりする、典型的なプログラムが過ぎていく。

1つ言いたい。入学式って長すぎだと思っただよね…

とにかく、その長い入学式が終わり、私たち新入生が退場する。

私は入学式なんかより大事なことがあるのだ。あるときから私に興味を持ち続けている彼、「比企谷八幡」だ。

同じ中学でクラスメイトだった彼を追いかけ、私は総武高校にきた。

……まって！決してストーカーとかじゃないよ！ただ進路希望調査を集めるふりして進学先知ったとかじゃないから!!

……今のがすべてを語った気がする（確信）

まあ、とりあえずなんで彼に興味があるのか少し語ろうと思う。

あれは、中3の冬休みのこと……

~~~~~

「白ちゃん、あけおめ〜ことよろ〜」

「白っち、あけおめ!」

「あけおめ!二人とも!」

冬休みと言えば正月！正月と言えば初詣！なんて感じで初詣に友達と来ていた。

一人はスポーツ女子！って感じで私を白つちと呼ぶ東菊（ひがしきく）

そして、私のことを白ちゃんと呼ぶゆるふわな感じ（計算だと思う）の古河摩耶（こがまや）だ。

「二人は何お願いするのお？」

「もちろん彼氏がほしいって願う！」

「いやいや、受験受かるにするでしょ普通！」

ちよつと！摩耶が素に戻ってるって！

「まあ、菊はいつも言ってるから今さらでしょ」

「それを言われちゃおしまいだよっ！そういう白つちはどうなのさっ！」

「私は無難に受験合格だよ？」

「裏切りものめ！」

「ええええ！」

「まあまあ二人ともその辺にしとこうよお」

「そうだね、私たちの番もうすぐだし」

そんな感じで初詣をして、帰り道を三人で歩く。

おしやべりしながら歩いてたら駅につく。

「それじゃあね、二人とも！」

「バイバイ、白」

「じゃあね白つち！また新学期に！」

二人と駅で別れて町を歩く。

ふと、路地裏に目を向けると不良二人組がカツアゲしていた。

カツアゲされている人の顔は真っ青だ。

私はどうしようか必死に考えていると、一人の男子が不良たちに向かって歩いて行った。

その男子は、猫背で特徴的な目とアホ毛だった。

その男子は私とすれ違ふとき、

「警察に連絡よろしく」

とだけ言っていた。

私はすぐさま警察に連絡し、その男子と不良の様子を見る

「おい、あんたらその辺にしとけよ」

「なんだおまえ、いきなり割り込んできたとおもえばそんなことかよ！」

「調子に乗るのもたいがいにしろよ！」

「はっ！調子に乗ってんのはお前らだろ。いい年してカツアゲかよ。不良してる俺らカツケーですか？そんなことしたって好きな人にはモテませんし、むしろダサイまである」

うわあ…よく相手の神経逆なでするような単語出てくるなあ…

そんなことしてると…

バキイ！という音ともに彼は殴られていた。

ですよねえ…

「あんだけ言ってももしよせん口だけかよ！」

「こいつからも金巻き上げるか！」

不良たちもすつかり調子に乗っている。

すると彼は、

「何言ってるんだよ。今ので恐喝罪だけじゃなく暴行罪も追加されたんだぜ。その意味よく考えろよ」

と起き上がりながら平然と言つてのける。

その台詞に合わせるかのようにパトカーのサイレンが響き警察が下りてくる。

その後は流れるように早かった。

不良は抵抗していたが、警察の前には無力だった。

通報した私、カツアゲされていた男性、そして助けに入った彼は事情聴取されて幕を閉じた。

どうでもいいけど幕を閉じたってなんかかかっこいいよね。

彼とは終わる時間が違かったらしく、私が帰るときにはいなかった。

このときは彼が比企谷君だとはわからなかった。

その後は何も起きず、ただ日付だけが過ぎていった。

冬休みが明けて中学最後の学校が始まる。

クラスにつくと菊と摩耶が駆け寄ってくる。

「ひさしぶりい」

「どうだった冬休みは？」

「ん〜とくに何もなかったかな」

などといったって普通の会話をする。

ふと、教室の窓側に視線を向けた瞬間、私は固まった。

私の視界に映ったのは、冬休みにみた猫背で特徴的な目とアホ毛を持つっていた男子だ。

なんで彼がここにいるの!?!?!?!?!そりやこのクラスのクラスメイトだからだろ!!と一人でツツコミしていた。

今まで彼が同じクラスなんて全然わかんなかった…

そんなこと考えていると、固まった私を気になった二人が視線を追う。

「ああ、ヒキタニかあ」

「またあいつ本読んでニヤニヤしてるよ」

「きもいよお」

「ああいうのは家で見てろよ」

二人は彼を見るなり悪口を言っている。

実際は優しいだけなのに…

…いや、私もあれしか見てないから判断はできないんだけどね
しかし、一度視界に彼が見えると疑問ばかり頭に浮かぶ。

なんであのとき助けに入ったのかとか、なんでいつも一人でいるのかとか、ケガは平気なのかとか、もう止まらない。

私は彼に話しかけようとすると、二人が

「何してんのぉ?白ちゃん」

「そっち行くのやめたほうがいいって!ヒキタニ菌移るよ!」

と言って私をつかむ。

私はそんなことどうだっていいのだが友達は失いたくないので素直に従うしかなかった。

結果を言おうと卒業しても一度も彼と話すことができずにいたのだ。

友達付き合いや、周りからの評価ばかり気にしている私には、話しかけることすら怖かったのだ。

せめて高校だけでも！と思いき学級委員という立場を利用し、彼の進路希望調査を回収すると同時に確認した。

そのとき彼が頭の良い総武高校を受けると知り、マジかよ頭よすぎい！と思つたのは内緒だ。

必死に勉強して私は総武高校に合格したのだった。

そう彼を追いかけて……………

~~~~~

ということなんだよ諸君（ドヤ顔）

…誰に向けて言ってるんだろう？

まあそんな理由でここに来たわけなんだけど……………彼が見つからん!!

幸い同じクラスだったので簡単に会えると思っていた。

入学式も来てなくて、最初は寝坊かなと考えていたのだがここまでくると違うのだろう。

考えているとホームルームが始まり先生の話が始まっていた。私は思考を一度遮断し、先生の話に耳を傾ける。

連絡事項が担任から伝えられ、続けて自己紹介の時間となる。

そのとき衝撃的なことが語られた。

「比企谷という生徒がこのクラスにいるんだがな…交通事故にあつたので入院しているのので1ヶ月程度来れないらしい。そのことを一応覚えといてくれ」

……えええ!!彼が交通事故!?なんで?なんでなのかな?いや、考えてもわからないことはやめよう。後で先生に聞けばいいだけのことだ。

その後はスムーズに自己紹介が進み、流れ解散となる。

私は終わると同時に席を立ち、先生に比企谷君のことを聞こうとし



た。

しかし、その私の行く手を阻む数人の生徒が来る。

もうっ!!邪魔だよ!君たちより大切なことがあるんだよ!とは言えず、私を邪魔した人たちに視線を向けた。

「日代さん。俺鈴木っていうんだ!一年間ヨロシク!」

「俺は矢田です。同じくよろしく!」

「あつ、わたしもよろしく!姫野だよ!」

「わたしは臆っていうの。よろしく」

とこんな感じに自己紹介された。

確かに中学でもそれなりに友達はいたし告白もされたことはある。それなりの容姿があると自分でも思う。だが、今はほんとに困る。

結局この日は交流を深めようとか言われ、比企谷君のことは聞けなかった。

次の日、私は朝早くから職員室にいる。

なぜかって?も・ち・ろ・ん比企谷くんのことだよ☆

…なんだろうこのテンション

とりあえず担任を探そう。担任は…いた!

「せんせーい!」

「なんだ?ええーつと確か日代?だったか?」

「はい、合ってます。聞きたいことっていうのは、比企谷君のことなんですけど…」

「?ああ、事故にあった理由とかかな?」

「そうです」

「ふむ、彼が事故に立った理由か…私も詳しくは知らないが、犬を庇つてのことらしい」

犬を庇って?彼についてまた疑問が浮かぶ。

比企谷君は何で助けたのだろうか?

まあそれは本人に聞けばいいか。

「先生ありがとうございます。もしよろしければ病院の場所を教えてくださいませんか?」

「それについては済まない。彼は面会は拒否しているらしい。理由は

わからないが…」

「そうですか。わかりました」

そう言っつて私は職員室を後にする。

会えないのなら仕方がない。彼が退院するまで待とう。

私はそう心に決め、学校生活を始めた。

## 第2話 私は彼に近づく

入学式から1ヶ月が過ぎようとしている。

桜は散っていき、緑の葉に変わろうとしている。

この1ヶ月でクラス内のグループが出来上がりつつある。

リア充っぽいグループ、陰キャラで集まっているグループ、女子のオシャレグループ、トップカーストに位置している男女のグループ、大まかに分けるとこんなかんじだ。

ちなみに私はトップカーストに位置しているグループにいる。

別に私はこのグループに入りたかったわけではない。

気がついたらこのグループが出来上がったただけなのだ。

まあ、悪いグループではないと思う。

私もそれなりに楽しんでいるし。

今日も習慣化された授業が過ぎていく。

私は毎日放課後になるとため息がでる。

ため息の原因はわかっている。

彼、比企谷君が学校に来ていないからだ。

入学から3週間を過ぎた辺りからもしかしたら退院が早まって今日来るのではないか？なんて思い始め、毎日期待感と残念感を味わっているのだ。

そんな顔をしていると、

「日代さんどうしたの?」

「最近ため息ばかりじゃない?」

2人分の声が聞こえ、顔を上げるとあげてみれば…鈴木君と、矢田君ではないか。

「いや、別になんでもないよ」

「そう?何かあつたら言つてね」

「俺ら力になるからさ」

私はありがとーとだけ2人に返す。

この2人、入学初日からなにかといつて声をかけてきていつも私のところに来る。

2人は周りからはイケメンと言われるカテゴリーに入るらしい。あとは、入学初日のときにきた姫野ちゃん、臙ちゃんだ。

2人もかわいいので結果としてトップカーストのグループになったのだ。

：実際言うところ「嬉しくねええ!!」と、キャラが崩壊しそうなほど良くない。

別に雰囲気が悪いとかいうんじゃないんだよ!!

私は注目されること、視線を必要以上に向けられることが嫌いなのだ。

このグループにいてことで視線が360。どこ方向からも来る。

私の視線が来ない範囲は天井と床からだけ：

そんなこんなでまた私の1日が過ぎていく。

5月も後半になる第3月曜日、つまり入学から1ヶ月と1週間ぐらいの今日がきた。

私はベットから起き上がり時計を確認する。すると同時に驚愕した。

簡単にいうとじ・か・んがヤバイ(汗)

主人公のテンプレかよ!!って心でツツコミをしつつ、光の早さの如く着替えた私は、全力で通学路を走っていく。

こりやあ大事件だぜ!とにかくダツシュ!

何とかチャイムの鳴る前に教室へ滑り込む。

「日代さん寝坊か?」

「そんな一面もあるのか…」

「おはよー日代さん」

「おはおは白ちゃん」

と、教室からさまざまな声が入ってきた。

私はおはよーとだけみんなに返して席につく。

座ったと同時にチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

私は鞆から教科書を出し顔を上げた。

その瞬間思わず

「えっ!」

と大きな声がでていた。

「?どうした日代」

「い、いえ、なんでもないです」

先生が不思議な顔して聞いてきたので、とっさに返事をして前を向く。

そう、私の前には彼がいたのだ。

顔は見えないが、猫背とアホ毛で彼だと確信する。

席は出席番号のままだったので、比企谷君の後ろは私、日代となっている。

そんなことはどうでもいい。私は彼と話がしたい。

だが、授業があつて話しかけることができない。

こんな悔しいことはない。

なんで早く起きなかつたんだよ私!!

すると、

「今日からこのクラスに比企谷が戻ってくる。比企谷、自己紹介を頼む」

と、先生が彼を紹介する。

比企谷君はというと、

「えつとお…ひきぎやつ…比企谷八幡です。よろ、しゆくおねがい、しましゆ…」

とカミカミだった。

「比企谷他にはないのか?」

「ええと、あつ、ありましえん」

とだけ言い、席についた。

「まあいいか、授業を始める」

先生が授業を始めたので、黒板を見る。

…ふええ、授業よりも比企谷君ばかりみてるよお…と、自分でもわからないぐらい彼を見ている。

そんなこんなで授業が終わる。

彼に話しかけようとしたとき、

「白ちやくん、ちよつと来てー」

と、いつものメンバーに声をかけられる。

ちくしょう！私不幸すぎるでしょ。彼とは接点をもてないかよ。

私は彼女たちのもとへと向かう。

「あのひき…ひき…ヒキタニ君どう思う？」

「俺はただの影薄いやつにしかおもえない」

「そしてあの目な！なんというか濁ってる？いや、腐っている？か」

「そうそう、なんかヤバそうだよね！」

私が来ると同時に4人は彼について悪口を始めた。

またか、ここでも彼はそうなってしまうのか…。

そう感じた私は、

「あれっ？名前比企谷君じゃなかった？」

とだけ言った。

「そんな感じだったかもねえ」

「まあ、アダ名でしょ、アダ名！」

くうう、変わんなかったか…これ以上は無駄な気がしたので止めておこう。

とにかく！私の第1目標としては今日中に比企谷君に話しかけることだ。

時は過ぎて昼休み：

いや、聞いてよ…言い訳を聞いてよ…

比企谷君にさあ、話しかけらんないんだけど！

休み時間は寝てるか、トイレで時間まで隙がない。

不機嫌になりながらお昼を食べる。

お昼も終わり、そのまま流れるように授業も終わる。

…別になにもないのに言っても面白くないからね☆

そんなわけで放課後！

私は先生に雑用を頼まれてしまった。マジカヨ…

ちなみに頼まれた理由としては、私がまた学級委員になったからだ。

自分からじゃないんだけど推薦されてね、なっただですよ。

まあ、そんなこんなで仕事も終わる。

私はふと、テニスコートのそばを通りがかった。

私は、このときの自分を称賛したいと思う。

私の視線の先には比企谷君がいたのだ。

…思わず見とれてしまった。

今彼は、本を座って読んでいる。

その彼の顔は教室にいるときとは違い、少年のようにいきいきしていた。

目は濁っておらず、むしろ輝いていると言ってもいい。

そしてあの笑顔。見ている人を引き込むようないい顔だ。

私は彼に近づこうと一步踏み出す。

そのとき、パキツと枝を踏んでしまった。

こんなときまで主人公展開か！

音がなった瞬間、彼はビクツとなり顔をあげる。

そして私を見たたん、目が濁りだした。

そのまま彼は荷物を片付け帰ろうとしてしまう。

…今これを逃したらチャンスはない！

「待って！比企谷君！」

私は大きな声をあげ、彼を呼び止める。

すると彼は立ち止まり、振り向きながら

「…なにか用か？」

と、聞いてくる。

やった！と内心喜びながら、彼と話をしようと彼に近づいていく。

### 第3話 彼の理由と彼の苦しみ

彼を呼び止めた私は彼に近づき、ちよつとした階段の部分に腰を掛けた。

「比企谷君も座ってよ」

私が声をかけると、彼は嫌そうに目を濁らせながら階段の端に座る。

むっ、そんな顔しなくなつていいじゃん！

そう思ってしまった私は彼との距離をつめる。

「おっ、おい、近いってー！」

「そんな顔した人にはちようどいいよー！」

どや顔で言つてやった。しかも人生最大の。

たださ、こう言つたけど私もすごくくく恥ずかしい。

だつてさ、やつと彼と話せるんだもん。

そりや恥ずかしくもなるよ。

隣で彼は、

「ちっ、わかつたよ。で？なんの用だ？」

ちよつ！舌打ちとか隣にいるのにする?!

そんなことはまあいい。

とりあえず話を進めよう。

「いくつか聞きたいことがあるんだけどさあ、…まず私のこと覚えてる？」

この質問をしたとたん、比企谷君の目が急に濁り度が増した。

私はすごく気になったのだが、彼が口を開いたので考えるのを止めた。

「…ああ、中3で同じクラスだった日代だろ？」

「さらに言えば今も同じクラスだけどね！」

私がそう告げた瞬間彼は驚いた顔をする。

「えっ、同じクラスなのか？全然知らなかったわ。」

…失礼な！同じクラスだよ！



「失礼な！同じクラスだよ！」

思わず心の声と一致。

マジか、クラスメイトとして認識されていなかったからしい。

「まあ、その…すまん」

「いや、別にいいんだけどね。じゃあ改めて、私は日代白、よろしく」

「…よろしく」

なんかよろしくする雰囲気ないけど大丈夫だよな？

「で、まだ質問があるんだけど、次は中3の冬休みにカツアゲされている人を助けたことなんだけど…」

「…ん？ああ、あれか。もしかして通報してくれたのってお前か？」

「そうだよ」

「そうか、あのおときはサンキュ。で、何が聞きたいんだ？」

「私が聞きたいのはなんで助けに入ったのだったのかってこと」

そう、これが私の興味の始まりなのだから。

「…別に、たまたま偶然にも俺が通りがかっただけだからだ。それ以外に理由はあるのか？」

いや、嘘だ。私にはわかる。

彼が真実を隠してるように感じてならない。

「…とりあえずそういうことにしといてあげる。じゃあ次、なんで一人でいつもいるの？」

「もちろん、一人が好きだからだ」

これは理由の1つなのだろう。真実ではあるがまだ理由がある的な。

「じゃあ次、くくく」

幾つか質問をして彼の答えを聞く。

でも、彼との会話は楽しいはずなのにとても悲しく感じてしまう。心に生まれたこの感情をなくすために私は最後の質問を彼にした。

「じゃあ最後に、君は…いったい何に怯えてるの？」

「っ！…なんのことだ？」

「比企谷君はさあ、ポーカーフェイスで感情を出さないようにしてるけど、私の質問に答える度に悲しそうで、何かに怯えてる顔をしてる

よ」

「…そんな…ことは…」

「あるよ、隣で見てた私が言うんだもん。私は知ってるよ。本当は優しくして、誰よりも人のために動ける人だってことを」

「それは違うー！」

比企谷君はいきなり大きな声をあげる。

「…いきなり大声を出して悪い。だが、俺はそんないいやつなんかじゃない」

「その理由を聞いてもいいのかな？」

「…ここまで話してしまったなら、もう変わらんからな」

「…ありがとう」

彼の生き方を変えた理由をついに聞ける。

悪いとは思っているけど、やはり興味が上回っている。

「どこから話すか…。まあ、きつかけからでいいか？」

「そこからお願い」

「そうだな、きつかけは妹が生まれたときからだな」

「妹？」

「ああ、2つ下にいるんだが両親が溺愛するほどでね。妹が生まれてから俺は一切相手にされなくなった。いつからか俺は家族旅行を断ってき、「自分の意思で断ったんだ。愛されていないからじゃない」って思ったかったのさ」

それが彼の始まりだったんだ。

「まあ、これはきつかけにしか過ぎないんだ。ひどくなったのは中学からだ」

えっ、中学？そんな感じ全然なかったのに…。

「俺は好きだった人に告白したんだがな、フラれてな。まあ、そのときは俺も優しくされたぐらいで勘違いしてしまっただけのことなんだがな。問題はそこじゃなくて次の日のことなんだ。学校に行ったらクラスのやつ全員に告白したこと知られてた。周りから「あいつかおりに告白したらしいよ」「まじー！ありえなくない？勘違いもいとこじゃん」って聞こえてきてな。それでわかったよ。ああ、あいつは

友達に言ったのだろう。からかう対象として。俺はバカ野郎だったんだ。勝手に期待し、人生はうまくいくと思ってた。それから周りすら信用ならなくなつてな、一人でいるのが一番いいと思つたのさ。だから一人でいる」

…比企谷君にそんな過去が…でも、

「…じゃあなんで冬休みするとき人助けしたの？」

「あれはな、結局のところ自己満足なんだ」

「自己満足？」

「そうだ、俺は人を助けることができる。それだけの価値はあるつてな。まあ、お前が通報してくれなきゃできなかったわけだが…」

「…なるほどね。…それでさ、この高校にしたのはなんで？」

「それは中学のやつらがいらないと思つたからだ。だが、お前がいたのは予想外だった」

そりゃ、君を追いかけてきたからね。

「最後に、なんで入学式に事故にあつたの？」

「その日はな、俺らしくもなくテンションがあがつていき、早く学校に行つていたんだ。そしたらさ、どつかのアホが犬のリードを離してな、その犬を庇つて事故つただけだ」

「ふーん、それも自己満足つてやつ？」

「ああ」

これで全ての疑問が解決した。

彼の理由、彼の生き方を。

でも、それって悲しくないのかな？

聞いたところで彼は悲しくないと言えよう。

彼はもう周りに期待をしていない。多分家族にも…かな。

でも、私は彼に期待をしてもいいかな？

だから私は、

「今日はありがとう。比企谷君のことが聞けてよかったよ」

「そうか、じゃあな。できればもう関わらないことをおすすめるがな」

「いや、私は君に関わり続けるよ」

「…なんでだ？別に俺みたいなやつよりも関わった方がいいやつなんてたくさんいるだろう」

「私は比企谷君以上に関わりたい人なんていないよ。たとえば君が誰にも期待してないとしても、私は君に期待する。私だけは君を裏切らない。だからさ、いつか比企谷君は私にだけは期待してよね」

彼は私の言葉に驚いている。

理由はわからないけどね。

でも、少しは期待してくれるといいな。

「…俺は簡単にその言葉を信用することはできない」

「別に信用なんてしてくれなくていいよ」

「…俺はめんどくさいぞ」

「そんなの関係ないよ」

「…っ。わかったよ。いつか…な」

「うん、それ言葉が聞けて嬉しいよ」

「そうか」

「じゃあ、帰る前にケータイ教えてくれない？比企谷君と連絡とりたいしっ」

「ああ、頼んだ」

そう言っつて比企谷君は私にスマホ渡してきた。

「えっ、渡しちやっつていいの？」

「別に見られて困るものないしな」

「えええ…」

…ほんとだ！連絡先ほとんどない！

私は驚きつつも自分のアドレスを入れて彼に渡す。

「はいっ、入れといたから。連絡するね」

「はいはい、じゃあ今度こそ帰らせてもらおうぞ」

「うん、またね」

「ああ」

彼と挨拶をして別れる。

荷物をまとめて私も家に帰る。

今日は色々とおつたな。

比企谷君と偶然だけど話すことができた。  
彼のためにできることはないかな。

私はそう思いつつ玄関を開ける。

「ただいま〜」

「お帰り、今日は遅かったわね」

「ん〜、ちよつとね話してたら遅くなった」

「それならいいわ、でも遅くなるなら連絡はしてね」

「わかった〜」

母と話して自分の部屋に行く。

明日は比企谷君と話せるかな？

私の新しい期待と興味を胸に1日は終わる。

## 第4話 私は彼との会話を楽しむ

ジリリリイ！という目覚ましとともに私は目が覚める。

私はどちらかというと言型なので朝には弱い。

眠い目をこすりつつもベットから起きてリビングへ向かう。

「おはよう。」

「おはよう、ご飯できてるよ。」

「ありがとうございます。そしていただきます。」

ご飯をもぐもぐ食べつつ、昨日のことを考える。

実は、家に帰ってから比企谷君と連絡していたのだ。

そう、時は数時間前のこと。

~~~~~

from：日代

to：比企谷君

題名：明日：

本文：こんばんは！

突然だけど：明日お話できないかな？

時間は比企谷君の都合に合わせてから！

送信つと！

送ってからメールを何度も見直してしまう。

変だったかな？大丈夫だよね？

5回ぐらい見直していると、ピリリつという着信音とともに彼からの返事が来る。

from：比企谷君

to：日代

題名：Re：明日：
本文：めんどくさいんだが：

…みじか!!
しかも断りぎみだし：
くそう、こうなったら

f r o m：日代
t o：比企谷君

題名：Re：Re：明日：

本文：なんとしても明日話すの!!
明日放課後ね！

ふはは！強引に決めてやったわ。
なんて勝ち誇ってる

f r o m：比企谷君
t o：日代

題名：Re：Re：Re：明日：

本文：了解
で、どこに集合？

よっしゃ！とガッツポーズしつつ、比企谷君に返事をする。

f r o m：日代
t o：比企谷君

題名：Re：Re：Re：Re：明日：

本文：そうだなあ、「友人の集い」ってカフェでどう？

f r o m：比企谷君
t o：日代

題名：Re：Re：Re：Re：Re：明日…
本文：了解

…うん、いつ見ても短い。
まあ約束したしいつか。

~~~~~

こんな感じ。

今日は楽しくなりそうだ。

時は過ぎて放課後。

なんで放課後かって？

だって比企谷君と話してないし、何より勉強シーンいる？

…誰に話してるんだろう。

それはおいといて、私はグループの人たちに別れの挨拶を済ませて  
カフェへと向かう。

…一緒に行かないのかって？

だって気づいたら比企谷君いなかったんだもの。

彼のことだから注目されるのが嫌だったんだろう。

そんなわけでカフェに着いた。

比企谷君はどこにいるのだろう？

辺りを見回す…いた！

カフェの向かいにあるベンチに座っていた。

比企谷君に近づき声をかける。

「比企谷君」

「うひゃっ…なんだお前か。」

「むっ、お前じゃないです。日代です。」

そう答えると比企谷君は

「あざといぞ」

「なっ！」



私のどこがあざとだっていうんだ（汗）

私はいつだって素だよ（汗）

「とりあえず入ろうよ。」

「話題のそらしかたがあからさまだが、それについては同感だ。」

私と比企谷君は店内に入る。

店員に2人とつげ、店内の奥の席に案内される。

「ご注文がお決まりになりましたらお呼びください。」

店員さんが戻っていく。

「比企谷君決まった？ 私まだなんだけど…。」

「ああ、俺は決まった。」

「えっ！ちよつと待って、すぐ決めるから。」

「…いや、別にゆつくりでいいんだが…。」

「ありがとう。」

私はなるべく急ぎつつ決める。

「決まったよ。」

「じゃあ、呼ぶか。すいませーん。」

「ご注文は？」

「私、チーズケーキとレモンティーをお願いします。」

「俺は、モンブランとアイスコーヒーで。」

注文を繰り返して店員さんが戻る。

…さーて、ここで問題がひとつ。

この沈黙どうしよう…。

比企谷君は自分からしゃべるタイプではないだろうし…。

悩んでいると…

「…で、なに話すんだ？」

!!まさかの比企谷君が最初に話すだと…。

このビックウェーブにのるしかない！

「えっと、具体的なことは決めてないんだよね…。」

「えええ…、俺から話題提供とか無理なんだが…。」

「それはなんとなくわかった。」

「…。わかったのかよ…。」

そんな話をしていると、頼んでいたのがくる。

「たべよっか。」

「そうだな。」

黙々と、私はチーズケーキ、比企谷君はモンブランを食べる。

ふと私は、

「比企谷君。」

「なんだ？」

「あーん。」

「は？」

「だからあーん。」

「は？なんで？」

「あえていうならなんとなく。」

「なら別にいいだろ。」

「じゃあ、私もモンブラン食べたいから交換ということ。」

「えええ。」

「早く。腕疲れてきたよ…。」

「ちっ、これだけだからな。」

渋々だけど食べてくれた。

口がやけてしまう。

「じゃあ次は比企谷君ね！」

「マジカヨ…。」

「マジだよ。」

またもや渋々といった感じで一口分すくって私の前にだす。

「…ほらよ。」

「あーん。うん、ありがとう！」

「…っ！」

比企谷君は恥ずかしいのか一気にモンブランを食べきってしまう。

「で、どうするんだ？」

「そうだなあ、じゃ好きなものは？」

「マッ缶。」

即答だった。

「そんなに好きなの？」

「ああ、千葉のソウルドリンクだからな。」

マツ缶には比企谷君の愛を感じるよ…。

「趣味は？」

「読書か人間観察だな。」

「ひとつ目は分からなくもないけど、ふたつ目はちよつと…。」

「プロのボッチにはオートスキルだぞ。」

「えええ…。」

そんなこんなで楽しい時間も過ぎてしまう。

「もうこんな時間かく。楽しかったよ！」

「そうか。」

「またよろしくね！」

「次があるのかよ…。」

「もちろん。」

「…機会があれば善処するわ。」

「それ絶対ないよね。」

「なぜバレた。」

「バレバレだよ！」

「まあ、そんなときな。」

「うん。それじゃね。」

「じゃあな。」

彼は自転車にまたがって行ってしまった。

今日は楽しかったな。

また、明日からも楽しくなりそうだ！

私はそう感じながら家に帰る。

## 第5話 私と彼のテスト勉強 前編

比企谷君と話してから早くも一週間ほどが過ぎた。  
あれから彼とはメールはしている。

：だけどね、会話をしてないの!!か・い・わ!がしたい。  
学校ではさ、話しかけられないのよ。

比企谷君相変わらず寝てるし、昼休みはたぶんあそこにいるんだろ  
うけど私がグループにつかまっているから行けない。

足りないよお…、比企谷君成分が足りないよお…。

えっ?これだと変態みたいだって?

やだなー、そんなわけないですよー。

とりあえず、何かアクション起こしますかあ!

テンションがおかしな方向に行ったけど何とかなるだろう。

とにかくメール、メールつと。

f r o m : 日代

t o : 比企谷君

題名 : テスト勉強

本文 : こんばんは。

あとちよつとでテストだね。

この話題でわかったと思うけど、一緒に勉強しよう!

送信!

さて、なんてくるかな?

f r o m : 比企谷君

t o : 日代

題名 : Re : テスト勉強

本文 : 断る

うん、予想通り。

まあ、無駄なんだよね、比企谷君。

f r o m : 日代

t o : 比企谷君

題名 : R e : R e : テスト勉強

本文 : いや、比企谷君暇でしょ？

日曜日の10時に駅で待ってるから！

これで君はチェックメイトDA☆

そうすると案の定、

f r o m : 比企谷君

t o : 日代

題名 : R e : R e : R e : テスト勉強

本文 : おい、勝手に決めるなよ…。

まあ、わかった。

ふっ、計算通り☆

これで今週も頑張れる！

時は次の日、ちなみに金曜日！

私は今、体育をしている。

女子は体育館でバレー、男子は外でサッカーらしい。

私は休憩の時間、外の男子たちの試合を見ていた。

外では、鈴木君と矢田君が目立っていた。

2人にボールが来る度に、同じように見ていた女子がキャーキャー  
言っている。

実をいうとかなりモテるらしい。

噂の葉山とかいう人とサッカー部スリートップらしい。

そんなことより比企谷君はと…あ、あれ？どこにいるの？  
いくら探してもいない。

比企谷くーん、どこだ〜い…。

先に言っておこう、私はこのとき周りを気にせず考えていた。

「危ないっ!!」

そんな声が聞こえた。

聞こえても私は反応できず、

「あたっ!!」

ボールが顔面に直撃していた。

痛みに耐えていると、

「ちよっ!血でてるよー!」

そう言われて、確認するとほんとに出ていた。

うわあ、ジャージまでべっとりじゃん…。

「日代さん保健室で手当してもらってきなさい。」

「わかりました。」

体育の先生に言われたので、保健室に向かう。

「すいませーん。」

「どうしました?」

「体育でボールが当たって血が出でしまったのですが…。」

「そうだったの。そこにかけて、今止血するから。」

保健の先生に言われたとおりに座る。

先生は素早く止血してくれる。

「ありがとうございます。」

「いいえ〜。仕事だもの。じゃあ、この時間はここにいいけど、次の授業には戻ってね。」

「わかりました。」

「私はこちらと荷物を受け取りに行ってくるからここをお願いしてもいいかしら?」

「大丈夫です。」

「じゃあ、よろしくね。ベットで一人寝てるから、あまり騒いじゃダメよ?」

「はい。」

「はい。」

「はい。」

そう言っ先生は行ってしまった。

私は戻るのも面倒なのでここにいることにした。  
10分ぐらいたった頃かな、ベッドの方で音がした。  
私は寝ていた人が起きたかと思いつつ、のんびりしてい  
た。

ここで私は一瞬フラグじゃない？と思ったが、そんな主人公体質で  
はないので気にしないことにした。

シャツ！という音とともに寝ていた人がでてきた。

な、なんと！その人はあくびをしながら出てきた比企谷君だった。

おい誰だよ、主人公体質ではないとか言っていたやつ。

おもいつきり主人公体質じゃん…。

「…、なんで日代がここにいるんだ？」

比企谷君の声で私ははっとする。

「いやあ、ボールが顔に当たって血が出てね。」

言いながら顔を指さす。

「そうか。」

「そういう比企谷君は？」

「試合開始直後に転ばされた。」

影が薄くてな…。とつけ加えながら窓の方を見ている。

「大丈夫なの？」

「むしろ合理的に寝れてラッキーだぞ。」

「…。」

「…、無言はやめてくれよ。」

「いや、比企谷君らしいなって。」

「だろ？」

ここでチャイムが鳴ってしまう。

「じゃ、先戻るわ。」

比企谷君がドアを開けて出ていく。

私はその背中を見ながら、

「日曜日約束忘れないでねー！」

と、声をかける。

比企谷君は手だけ上げて階段を上がっていった。

日曜日が楽しみだ。  
そんな私がいる、なんてね。



## 第6話 私と彼のテスト勉強 後編

私は着替えるのもめんどうだったので、体育着のまま教室に戻る。

「おお、大丈夫だった？」

「うん、平気だよ。」

朧ちゃんが聞いてきたので平然を装う。

実をいうとまだ痛い。

「日代さんごめんね？」

後ろから声をかけられる。

振り向くと、ボールを当てられたと思わしき人がたっていた。

「大丈夫だよ。よそ見してた私も悪いし…。」

「ほんとごめんね？」

彼女はそう言っただけで席に戻っていった。

さてさて、授業頑張りますか。

放課後〜。

授業も終わったので、私はグループのみんなとドーナツ屋に来ている。

いつもは部活などで帰りが揃うことはなく、一人で帰っている。

今日揃っているのは、テスト週間で部活が禁止だからだ。

最初はテスト勉強という名目で集まったのだが、結局おしゃべりしている。

まあ、そんなものだよね普通は。

この日はしゃべって終わり、6時半ぐらいに解散となった。

勉強とはいったいどこにいったんだ…。

さて、こんにちは。

待っていました日曜日！

私は駅に向かいつつ、身だしなみを確認する。

大丈夫かな？派手すぎたりしてないよね？

私は三度確認するぐらいに緊張している。

だって初めての私服姿だもん。

比企谷君って派手なの苦手そうだからなるべく大人しめに来てるんだけど…。

っと、そんなこと考えてたら駅に着いてしまった…。

現在時刻は…9時50分！それなりな時間かな。

さて、比企谷君はいるかな？

…いた！柱のところに寄りかかっていた。

私より早いなんて…もしかして楽しんでたとか？

そうだったら嬉しいな。

せつかくだし驚かそう（笑顔）

私は柱の影に隠れる。

目標確認！距離1メートル！突撃開始！

「おはよ！比企谷君！」（ダキッ）

「うおっ！日代か、…いや近いから離れてくれ！」

「ちえっ、しょうがないなあ。」

仕方なく私は離れる。

だがしかし、私は比企谷君の手を繋ぐ。

「おい、離してくれないのか？」

「ダメかな？」（ウワメヅカイ）

「…あざとすぎだろ。」

「失礼な、うわー心が痛いなあ。傷つけられたなあ。しょうがないか

ら、手を繋ぐことで許してあげよう！」

「嘘だろ…。」

「拒否権はないよ。」

「俺の人権どこいったんだか…。」

比企谷君は諦めたらしく、そのまま繋いでくれた。

嬉しさを心が100%！

「ところで比企谷君、私にいうことはないかな？」

私は服をアピールする。

「お、おう。に、似合ってるぞ。」

「ありがとう！」

露骨過ぎたが素直に嬉しい。

「で、どこで勉強するんだ？」

「ふっふっふ、図書館だよ！」

「まあそうだろうな。」

「と、いうわけでレッツらゴー！」

私たちは図書館に移動し、勉強スペースへ行く。

「さて、勉強しますか。」

「そうだな。」

「比企谷君って何が得意なの？」

「国語だな。ちなみに数学はできない。」

「えっ、私と逆じゃん。」

「そうなのか。まあ、始めようぜ。」

「うん。もしわからないところあったら教えてね。」

「俺にできる範囲でな。」

そうして私たちは勉強を始めた。

どれくらい時間がたっただろうか。

たまに質問しながら集中して勉強していた。

こんなに集中したのは久しぶりだ。

「そろそろお昼にしない？」

「そうするか。時間は…2時か。」

そんなに勉強していたのか。

「比企谷君どこか希望ある？」

「サイゼ…といたいところだが任せる。俺はあまり女子が好きそう

なところ知らないからな。」

「なるほど、じゃあ私が決めていい？」

「ああ。」

図書館からでて、10分ぐらい歩く。

目的地到着だ！

「ここだよ。」

「ここか。なんかリア充っていう感じじゃないな。」

「比企谷君そういうの苦手そうだからね。」

「ああ、だからよかったよ。」

「ならよかった。じゃあ入ろう。」

店に入り、2名と伝える。

そのまま案内され、メニューを置かれ、店員さんは戻る。

「時間が時間だったからすいてるね。」

「そうだな。」

「選ばうつか。」

「おう。」

メニューに目を移し、選ぶ。

少しして、

「決まったか？」

「うん、決まったから呼ぼう。」

すみませーんと店員さん呼び、注文する。

比企谷君はサンドイッチセット、アイスコーヒー。

私はカルボナーラとミルクティー。

「食べた後どうしよつか？」

「まあ、どこかでまた勉強つてのが普通だろ。」

「そうだね。でもこの時間だと、図書館の席空いてなさそうだね。」

「どうするか…。」

「あつそうだ！私の家はどうか？」

「えっ、いいのか。こんなやつうちにあげて…。」

「今日は姉がいるからね。あと、比企谷君ならリスクがあることはないでしょ？」

「まあ、その通りだか…。」

「と、いうわけで私の家ね。」

タイミングよく料理が来て、食べ始める。

30分ほどで食べ終わり店を出る。

「よし、行こう！」

「…うす。」

私の家に向かって歩く。

ひたすら歩く。

…、さつきから比企谷君下向いてなにもしやべらないんだけど。

もしかして嫌だったかな？

いや違うな、単に恥ずかしいだけだね。

20分ぐらいかけて歩くと私の家に到着だ。

「ここだよ。」

「お、おう。」

ガチャと音をたててドアを開ける。

「ただいま。お姉ちゃんいる〜？」

「はいよー。なんだい？勉強してたんじゃないの？」

そう言つてリビングからでてくる。

「いや〜、ご飯食べた後図書館行つても席うまつてそうだったからさ、家にしようかと。家ならお姉ちゃんに教えてもらえるし。」

「なるほどね。で、そちらは？」

「彼は今日一緒に勉強してた比企谷君。」

「お、お邪魔します…。」

「どうぞ上がつて〜。あつ、私は藍（あい）ね。日代藍。」

「は、はあ、よろしくお願いします。」

「リビングでいいよね、お姉ちゃん？」

「はいよー。」

リビングへ向かい椅子に座る。

「比企谷君はここ。」

私は隣の椅子をポンポンと叩き、誘導する。

「えっ、マジか。」

「なら私の隣にする？」

と、お姉ちゃんが隣に誘ってくる。

比企谷君すごい焦ってる。

「比企谷君早く。」

「お、おう。」

半分強引に隣へ座らせる。

「何を教えればいいんだい？」

「う〜ん？あつ、せっかくだし比企谷君に数学教えてあげて。」

「りよ。」

「えっ…、…よろしくお願いします。」  
「任せて。」

こうしてまた勉強を始めた。  
たまにお姉ちゃんに質問しつつ、テスト範囲を進めていく。

どれくらいたったかわからないが、ふとお姉ちゃんがそろそろ休憩にしようと言ったので顔をあげる。

「うわっ、もう6時か。」

「集中してたね2人とも。」

「そうだね。」

上から比企谷君、お姉ちゃん、私だ。

「私、そろそろ夕飯作るけどどうする?」

「じゃあ、比企谷君もどう?」

「…迷惑じゃ…なければ。」

「ぜーんぜんかまわないよ。むしろ食べてほしいぐらいだし。」

「よし決まりだね。お姉ちゃんお願い!」

「任された。」

お姉ちゃんが料理を作り、私と比企谷君で皿などの準備をする。

30分ほどで料理ができ、机に並べられる。

メニューは唐揚げ、野菜炒め、味噌汁という感じだ。

「じゃ、食べよう!」

「…いただきます。」

比企谷君は唐揚げを口にはこぶ。

「っ!お、おいしいです。」

「ならよかったよ。」

「流石お姉ちゃん。」

そのまま談笑しつつ、ご飯を食べ終わる。

「ごちそうさまでした。」

「はい、お粗末さまでした。」

「この後どうする?」

「長居するのも悪いから帰るよ。」

「そう?別に居ても大丈夫だよ?」

「いや、妹も家で待たせてるし帰るかな。今日は助かった。」

「それならよかった。また来てね！」

「また機会があれば…な。」

絶対来ないなこれ。

まあ、無理言つて来てもらうか。

「あ、帰る前に連絡先教えてもらつていい？」

比企谷君はどうぞと言つてケータイをお姉ちゃんに渡す。

交換が終わると、

「今日はありがとうございました。お邪魔しました。」

「はい、じゃ、またね。」

「比企谷君また学校でね。」

と、挨拶をしてドアから比企谷君が出ていく。

ボタンとドアがしまると同時に、

「白、いつの間にあんな男子を？」

お姉ちゃんが問いつめてきた。

「…っ、戦略的撤退！」

私は逃げた。

「逃がさないから。」

お姉ちゃんの目が本気だった。

まあ、結局捕まって全部話したけどね。

お姉ちゃんには逆らえない…。

## 第7話 私と彼と雨

テストも終わり6月もどんどん過ぎていく。

テスト結果？もちろんよかったよ。

なんてつたつてモチベーションよかったからね！

比企谷君もよかったらしい。

数学が平均超えたのに驚くくらいには。

6月は祝日ないから特別なこともない。

なにかないかなあ〜とソファア〜でごろごろしてる休日のこのごろ。

ガチャツという音が聞こえたので、振り向くとお姉ちゃんが悲しそ

うな目でこちらを見ていた。

「あんだ、休日によろこぶことないの？」

「例えば？」

「掃除するとか、勉強するとか、出掛けるとか」

「いや、どれも別にしたくないし」

「そんな白にビックニュース！」

「？なに？」

「実は先週比企谷君と出掛けてきました！」

ちよっ！なにしてんの！

「ちよっ！なにしてんの！」

私はめっちゃ動揺していた。

なぜお姉ちゃん？！

「ふっふっふ、なぜかって？そう、テスト勉強見てあげたお礼にという名目でさー！」

「えっ？なに、なんで考えてたことわかるの？」

「顔に出てるで」

うそーん。

これでもポーカーフェイスは完璧なんだけどな。学校では。

「比企谷君のときだけすぐく分かりやすいよ」

「MA☆Z I☆KA」

「いや、ぐまかさなくていいんで」



「…さーせん。」

「まあ、楽しかったよ!」（ドヤ顔）

「ちきしょー!!」ダツ!

駆け足で自分の部屋に逃げました。

逃げ込んだ私はすぐに比企谷君に電話を掛ける。

プルル、プルル、プルル

…出ない…。

もう一度かけるか。

プルル、プルル、プルル…

『もしもし?』

「もしもし比企谷君?」

『…なんだ?』

「この前お姉ちゃんと出掛けたってほんと?」

『…』ダラダラ

「おっと、沈黙は肯定だよ?」

『…出掛けたぞ』

「ふーん、へえー、楽しそうだなあ、出掛けたいなあ。あれ? なにか言

いたそうだね?」

『…もしよければ今度出掛けませんか?』

「その言葉を待っていたよ!」

『無理やりだっただろ』ボソツ

「ん? ナニカイツタカナ?」

『い、いえ! 別に!』

「それじゃまた連絡するから!」

電話を切ってリビングに行こうとドアの方へ向く。

すると、

「おやおや仲のよろしいことで。」ニヤニヤ

「…待てやごらー!」

「あばよっ!!」

この後返り討ちにあつただけ言っておこう。

何にもない平日の放課後だよ☆

さてきて、私こと日代白は今ちよつとだけ困っている。

なんと！な、なんと！雨が降っています。

えっ！それだけ？と思うじゃん、傘持ってかれてましたね。持って行ったやつ許さん。

まあ、最終手段のお姉ちゃんに連絡しますか。

電話をかけてつと、

『ほーい、どした？』

「いやあ、傘盗まれちゃってね」

『ほほーん、それで私にか』

「そう、だから一緒に帰って」

『うーん…あつ、とりあえず教室まで来てよ』

「りよ」

なんか企んでた気もするけど…ま、いつか。

向かいますか。

ついたのでガラツとドアを開けて入る。

「お姉ちゃんきたよー」

「おつ、きたね。でももうちよーと待ってね」

「？まあいいけど…」

疑問に思いつつ待っていると、

「急いできてくれってなんですかね？いきなりすぎてちよつと困ったんですけど…」

ため息まじりに比企谷君が入ってきた。

「ひひ、ひ、比企谷君な、んでこ、ここに？」

「なんでつっていきなり呼ばれたからなんだが…」

「そうそう、いきなりで悪いね！ここでひとつお願いなんだけど、傘がない白と一緒に帰ってくれないか？」

「お断りします」

「断るのが早い！」

お姉ちゃんとシンクロした。

「そこをなんとか！」

「なんで俺なんすかねえ」

「なんでって？面白そうだから？」

「帰ります」

「待って待って！冗談だから！…半分は」

「この姉半分遊んでやがる。」

「…まあわかりましたけど」

「さすが比企谷くん！話が分かる」

「はあ、先行ってるんであとから来てくれ日代」

「なんとなく言いたいことが分かったので「わかった」といい比企谷君がドアから出ていくのを見送る。」

「さて、理由を聞こうかな？お姉ちゃん」

「何のことかな？」

「とぼけなくていいよ」

「とりあえず言えることは、出かけたときに何かあったってことかな」

「ふーん、今は言えないということだね？」

「そうだねえ」

「わかった。いつかね？」

「うん、いつか」

何があったかはわからない。

でも今無理に聞いてこの状況が変わるわけでもない。

なら、待つしかないのだろう。

比企谷君が待ってる、急ごう。

私はちよつと駆け足で昇降口に向かった。

「比企谷君お待たせ」

「いや、俺が頼んだんだ、気にしないでくれ」

「じゃあ、よろしくお願いします」

「はいよ」

比企谷君の傘にいられてもらって帰る。

…よくよく考えれば相合い傘やーん。

お姉ちゃんがなに考えてるかにはわかんないけどこの時間を楽しむとしよう。

「ねえ、比企谷君」

「なんだ？」

「相合い傘だね！」

「…っ！なに言ってるんだ?!」

「だってそうでしょ？」

「ばっかお前、相合い傘ってのはなあ、好きな人同士でするものであつて俺とお前の場合は違う。単に傘がない人と持っていた人がいたつてだけだ」

「むっ、比企谷君はそういう考えなんだね」

「そんなもんだろ」

「普通の男子だったら相合い傘っていうのに…」

「あいにく俺は普通じゃないからな。プロのボッチですから」

「ええー、私は友達じゃないの？」

「さあ？」

「むむむ…」

そうこうしているうちについてしまった。

「じゃあな」

「まだ話は終わってないけど…」

「友達なんていいもんじゃないぞ、俺となんてな」

「そんなの人それぞれでしょ？」

「そうかもしれないがな…」

「私がそう思ってるからいいの。比企谷君が友達って言ってくれるまで待ってるからー！」

「…まあ…いつか…な」

「…いつかね」

「…それじゃあな」

「うん、またね」

比企谷君は帰っていった。

私は彼と友達になりたい。

彼との日常は面白さで溢れている。

急いで距離をつめても、逆効果になってしまうだろう。

なら、自分のペースに持っていくしかない。

私は私らしくね。  
君に言わせてみせるよ。  
だから待っててね。

## 第8話 私と彼の夏休みへのカウントダウン

梅雨があけてからどんどん気温が高くなる。

ああ、夏がもうそこまで来ているんだ、と肌で感じつつ日常が過ぎていく。

衣替えも終わっているのでみんなワイシャツにスカートもしくはズボンと薄着になっている。

一部の人は体育着で登校しているけどね。

だから暑いと言って無防備になる女子も増えている。

それに釘付けになる男子もちらほらでてくる。

えっ？私はベストを着てるよ？

だってあまり見られるの好きじゃないもの。

さてさて、期末テストも近づいている今日この頃。

私は今本屋に来ている。

勉強はどうしたって？

朝に終わらしてきたさ！

あまり集中できないから夜には少ししかしないのだ。

私はテストが終わったあとに読むご褒美としての本を探している。

私としては本を結構読むのでジャンルなどは気にしない。

漫画も読めば文学、ラノベなども読む。

まあ、他の人に話しても通じないからあまり話さないんだけどね。とりあえずぱぱと決めてしまおう。

私の決め方はいたってシンプル、「タイトルで決める」だ。

タイトルでビビッときたものは大体自分好みだったりする。

店内をぐるりと周り、本を探す。

一周し終わって探した本は3冊。

どれもタイトルからして面白そう。

私は会計を済ませて店をでる。

私は帰ろうかと考えたが、せっかく外に出たのだし甘いものを食べ

ようと近くのカフェに向かって歩き出す。

歩いていると、特徴的なアホ毛が私の視界を横切る。

これは比企谷君に間違いないと思い、私は進行方向を変えて彼の方へ歩き出す。

あとちよつとで彼の背中だ。

私は手を伸ばして彼の服をつかんだ。

「比企谷君」

「ぐえっ」

おつと、襟をつかんだので比企谷君は変な声をだしてしまった。

「ご、ごめん、大丈夫?」

「ごほっ、ごほっ…なんだ?…って日代か」

「うん、ごめんね?」

「いや、大丈夫だがなんのようだ?」

「えつとね、歩いていたら比企谷君が見えたから声をかけようと思つて」

「なるほどな。俺にはできない行動だな」

「…流石比企谷君」

「おい、やめろ、そんな目で見るなよ。悲しくなるだろ…」

比企谷君と会話を繰り返していると、

「あのー、そろそろ私を忘れないでもらえると…」

比企谷君の隣からこんな声が聞こえてきた。

「あつ、ごめんね?えつと…」

そういつつ、私は隣に視線を向ける。

この女の子は比企谷君と反対で明るそうな感じだ。

比企谷君と一緒にいるってどんな関係だろう。

もしかして彼女?

「えつとですね、私は比企谷小町です。隣にいる兄の妹です」

彼女?と思わしき人が自己紹介してくれた。

…って妹!?彼女じゃなかったのか…。

そういえば似ている。

主に頭の上のあれが。

「ところでお兄ちゃん、この人は誰？」

「えつとだな…」

「あつ、じゃあ私から。私は日代白。比企谷君とはクラスメイト以上友達未満かな」

「ほほう、お兄ちゃんを気にかけてくれるクラスメイトですか。よろしくお願いします」

「うん、よろしくね」

「もしかしてお兄ちゃん、最近よく出かけてたのって日代さんと？」

「…ああ」

「ほうほう。これはお兄ちゃんに春が来たのか？」

最後の方が聞こえなかったけどなんだったんだろう。

「ところで日代さん」

「白でいいよ、私も小町ちゃんって呼びたいから」

「わかりました。それで、白さんはこれからお暇ですか？」

「？別に暇だけど…」

「なら小町たちとお茶しませんか？白さんのこともっと知りたいです  
ので」

「私は平気だけど…比企谷君は？」

「ええ…じゃあ俺はかえ…」お兄ちゃん？「りません！喜んでお供させていただけます！」

わーお、力関係がみてわかるね。

「それじゃあ向かいましょう！」

小町ちゃんの一声で私たちはカフェに行き、入る。

ぱぱっと注文して、運ばれてくるのを待つ。

来たのを確認してから、待っていました！という感じで口に運ぶ。

「ん〜おいしい〜い」

「はい、おいしいです！」

「そうだな」

したつづみしつつ、トークが始まった。

「白さんはいつから兄のことを知っていたんですか？言うてはなんです  
が、こんな性格と腐った目なので気にかけることなんてないと思



ますが…」

「ちよつと小町ちゃん？腐った目は余計だと思うの…」

「お兄ちゃんは黙ってて」

「アツハイ」

「えつとね、実は中学のときから知ってはいたの」

「ふむふむ」

「でね、比企谷君がいつもひとりでいる理由が知りたくて話してみたいと思っていたんだけど…、中学のころの私は勇気がなくてね、話しかけられなかったの」

「なるほど」

「だから高校で話しかけようと思ってここに来たの。それで運よく話す機会があつてね、そこから話すようになったかな」

「へえ、そんなことが…」

「なんか恥ずかしい。」

「ちよつと顔が赤いかも…。」

「比企谷君を見てみるとそっぽを向いて頭をかいていた。」

「比企谷君も恥ずかしいらしい。」

「いやあく、正直に言うんですけどビックリですね。兄にこんなかわいい女子の知りたいがいたなんて。家にいるときにスマホしよつちゆう触つてるのみて自作自演かな？とか思ってしまったので」

「えっ、それ初耳なんだけど…」

「だって言っていないし」

「…」

「まっ、まあこれで比企谷君のことがわかったからいいんじゃない？」

「まあ、そうだな」

「この流れで2時間ぐらい質問されました。」

「あと、私の連絡先が一つ追加された。」

「さあさああの日から数日、何事もなく過ぎた。」

「私は今この瞬間、期末テストが終了した。」

「長かったよ…。」

「しかも今回は範囲広かったし。」

まあ、もうテスト終わったからいいけどね。

残すはテストが返ってくるのを待つだけ。

クラスメイトもそう考えているのかみんな騒がしい。

「よっしゃー！終わったー！」

「夏休みどこ行く？」

「どこにしようかなあ」

「プール、夏祭りとかは外せないよな」

「確かに！」

「それは外せない」

などと私のいるグループも浮かれている。

私は聞き流しながら比企谷くんのことを見ていた。

比企谷君は夏休みどうするのだろう。

帰ったら聞いてみよう。

「日代さん」

「ん？何かな？」

話しかけられたので思考を中断して顔を向ける。

「日代さんもプール行くよね？」

「そうだね、日にもよるけどたぶん行けるよ」

「了解。じゃあ計画しておくね」

「うん、よろしくね」

返事だけしてまた思考を開始する。

比企谷君をどうやって誘おうかな？

比企谷君外にでないからなあ。

夏休みまであと何日かなあ。

そんなことを考えているだけで私は嬉しくなってしまうた。

ああ、きつと楽しい夏休みでありますように。

そう思いつつ、私は日にちをカウントしていく。

「……………ちっ  
…楽しい夏休みが始まる？」

## 第9話 私と彼の夏休み 前編

終業式が終わってしまえば、学校の大多数が待ち望んでいる夏休みだ。

課題が出されるが、それを入れてもプラスになることだろう。

そして、私もその中の1人である。

しかし、この夏休みというイベントは、学生に与えられる1つの試験だと私は考えている。

なぜなら、1ヶ月ちよつとの休息の間に出された課題を終わらせ、今まで築き上げた人間関係を保つために過ごす。

これからの学校生活を送るために。

そうすることで「学校での私」という一個人を成り立たせる。

そのためにこの夏休みは存在しているんじゃないかと。

結論を言おう。

私たちの夏休みは「自分のため」ではなく、「自分の存在のため」だと。

「って誰がそんなこと書けって言った?」

「…さーせん」

現在の私は、姉の目の前で正座させられている。  
なぜかって?

作文だよ、作文。

「夏休み」って言うのを題材に書くんだけどね、私は国語嫌いな。

で、ヒントをもらおうとお姉ちゃんのところに行ったらさ、

「自分の経験からとか思ってたこと書けばいいんじゃない?」

と言われたから書いて見せたら

「正座」

「…えっ?」

「正座」

「イエス！」

正座をさせられた。

いや〜怖かったね、だってハイライトがなかったんだもん。

これはダメだと思ったね。

「あのさあ…、なんでこうなったの？」

「中学で学んだことをそのまま書いただけだけど…」

「いや、さすがにそれで出したら呼び出し確定でしょ」

「そうかなあ。私的には最高傑作なんだけど…」

「とりあえず書き直し」

「ええー、めんど「ん？」いわけないです!!書き直します!」

姉に勝てることはこの先もなさそうだ。

さあて、夏休みが始まって数日過ぎた今日この頃。

お姉ちゃんに怒られていた後の私は、小町ちゃんから連絡を受けて

サイゼに来ていた。

いいよねサイゼ、コスパがいい。

少し待っていると、小町ちゃんが来た。

「すみません。遅れてしまつて…」

「いや大丈夫だよ」

小町ちゃんはドリンクバーだけ頼むと、すぐ取りに行き、座つた。

「休みの日にすみません」

「いや、ちょうど気分転換したかったしよかったよ」

「それで早速なんですけど頼み事がありました…」

「頼み事？」

小町ちゃんが私に頼み事なんてなんなのだろう？

「ええ、実は兄の誕生日が8月8日ですてすね」

「ふむふむ」

「もしよければなんですけど祝ってもらえると嬉しいかなあ…なんて」

「なんだそんなことか。元からお祝いしようと思つてただけど、聞

きそびれちゃってね、分からずじまいだったんだよ」

「そうなんですか。じゃあ、お願いしてもいいですかね?夜は家で

パーティーを計画しているんですけど」

「任せて、比企谷君を連れ出してみせる！」

「ありがとうございます。で、夜のパーティーには白さんもいて欲しかったり…」

「えっ？いいの？私としては行きたいんですけど…」

「ぜひ！いつも小町と2人なので寂しいんです」

せつかくのお誘いだ、ここは乗らないと損になってしまう。

「じゃあ、いこうかな」

「はい！よろしくです！」

わずか1時間にも満たなかったけど、夏休みが一步進んだ気分だよ。

スキップ♪スキップ♪家にかーえる♪そして家のドアをオープン！

「ただいまー！」

「おかえり」

「その顔…、比企谷君がらみだね？」

ばっ、ばれたー！

そりやそうか、あんだけはしゃいで帰ってくれば…。

「まあ、そうだけど」

「よし、お姉ちゃんに話してみなさい」

「仕方ないなあ」

この後、笑顔で語ってやった。

お姉ちゃんも参加したかったらしく、小町ちゃんに連絡して、許可をとったことを伝えておこう。

時刻は夜9時

さてと、比企谷君を誘うとしますか。

私はメールでいいかな？と思ったが、せつかくだし電話を選択。番号を確認してから発信！

コール音がスマホから流れる。

時間たっぷり7コール目で

『もしもしっ？』

「もしもし、比企谷君？」  
「やっつとでてくれた。」

『なんのようだ？もしかして間違い電話か？』

「いや、違うから！比企谷君に用があるんだって！」

『…おつ、おう。間違い電話だったら泣いちゃってたぜ』

「全く…。比企谷君さ、8月8日は…暇かな？」

間を使うことがポイントですね。

さあ、どう答えるかな？

『おい、あざといぞそれ』

ちきしよー！ばれてたよ…。

やはり比企谷君には通用しないらしい。

もうやめようと心に誓った。

「ま、まあそんなことより暇なの？」

『…、本当は暇じゃないんだけどな、小町が出掛けてこいと言ってるか

ら暇でなくもないような気がする』

「で？結局のところ？」

『…暇です』

「よし、じゃあよろしくね？」

『へいへい』

「時間は11時、この前と同じで駅のあの場所ね！」

『わかった』

「それじゃあ、またね」

『おう』

電話を切つて、スマホをベツトに放る。

ぽすつと音をたててベツトに乗ったのを確認して、椅子に座る。

どーしよっかな、プレゼント何にしよう？

あらかじめ目安をつけておくのがいいよね。

そうだなあ、学校に着けてきても問題ないものが一番いいかも。

ネクタイピン？キーホルダー？メガネ？考えてみるとたくさんあ

るなあ。

まあこれは出掛けたときに探せばいいか。

(この結論にたどり着くまで1時間かかった)

大体の目星はついたので暇を潰そうと投げたスマホとって、電源をつける。

するといくつか通知が来ていた。

その中に私のいつもいるグループからのがあった。

どうやらプールの日程についてだった。

『プールどうする?』

『8月上旬あたり?』

『その辺が妥当じゃない?』

『と、いうと8月の4〜10日ぐらいか』

『この中でダメな日ある?』

『5日無理…』

『私9日〜』

『確か俺ら部活が4、5日ってあったよな?』

『そういえば…』

『あつ、4日も無理だった。』

『そうすると6、7、8、10のどれかか』

『あと、日代さん次第か』

『日代さーん、連絡よろしく』

『よろしく』

ここでとぎれていた。

ふむ、プールに行く日か…。

うーん、8日は絶対外せないとして…。

みんなには悪いが7日も断っておこう。

プールで疲れて次の日寝坊!なんていやだからね。

そうと決まれば、

『遅くなってごめんね!私は7日と8日はダメなんだ…』

よし、完了!

これで問題ないだろう。

時計を見てみると10時半だったので、素早く寝る準備を済ませてベットに潜る。



比企谷君と出掛ける服とかも決めとかなきやなあ。  
なんて考えながら私は眠りにつく。

「気になる、気になるなあ……。どんな予定かな？……日代さん」  
このときは気づかなかった。  
私の物語が大きく動いていることに……。

## 第10話 私と彼の夏休み 中編

時間は楽しみなほど待っているのが面倒だと私は考えている。だつてさ、待ってる間って他のことに手がつかないじゃない？

えっ？そんなことないって？

いやいや、意外とあるでしょ！思い出してみて。

まあ、言つてしまえば今まさにそういう状態。

いよいよ明日に迫る8月8日！

わくわくが止まらないぜ！

：いや、そろそろテンションを戻そう。

明日が8月8日なら今日は必然的に7日ということなのだが、私はららほに來ている。

その理由はいくつかあるが、最もなのは明日の服を買いに來たつてことだ。

隣に目を向けてみれば、同行者のお姉ちゃんがいる。

お姉ちゃんと一緒に來てくれと頼んだら、二つ返事でオーケーがもらえた。

お姉ちゃん曰く、

「私は比企谷君の誕生日プレゼントを買いに行くついでに、ついていく」

だそうだ。

ツンデレだな！とか考えていると睨まれたので、思考を切り替える。

今日の買い方はお姉ちゃん方式らしい。

手順は次の通りだ。

1：午前中のうちにいくつかのお店を周って、候補を決めておく。

2：ご飯を食べながら買う服を決める。

3：そして買う。

ね、簡単でしょ？

効率を求めるお姉ちゃんらしい買い方だと、私は思う。

おっと、話が長くなったね。

現在の私は、2番にあたる「ご飯を食べながら決める」だ。

しかも買う服は決めたので、駄弁っている。

「ついに明日だね！」

「なんでお姉ちゃんがテンション高いのさ……」

「いや〜だってさ、あの白が男の子の誕生日を祝うってことが珍しくてね」

そういわれればそんな気がする。

表面上なら何度かあったと思うが、しっかりと祝うのは初めてだったりする。

「そうだね」

「まあ、それだけ好きな男の子だつてことだよね！」

「そうだ…、えっ？なんだつて？」

なんかすごいこと言われたよ？

「えっ？」

「えっ？」

「??白は比企谷君のこと好きなんじゃないの？」

「ライクのほう？ラブのほう？」

「もちろんラブ！」

ふーむ。なるほど、わからん！

「いや、私は比企谷君と友達になりたいの」

「えええ…。自覚がないのか、だから鈍感なやつらは…」

えええのあとから全然聞こえなかったけど、悪いこと言われてるのはわかる。

「大体なんでそんなこと言えるのさ」

「それ聞いちゃいますか〜」

少しイラツときたが理由を聞くためだ、がまんがまん。

「それで？どうしてなの」

「それは自分で気づくべきだよ」

もう怒った！これはやるしかない。

「このやろー！」

「甘いぜ」

「グハッ」

渾身のチョップは防がれて、代わりにチョップされた。

…やはり勝てない。

「まあ、ヒントぐらいはあげるよ。ヒントはいつも自分に注目するところかな」

「？なにそれ」

「頭の片隅に入れといってくれればいいよ」

よくわからん。

「よし、服買いに行くか！」

「ちよっ、待ってよー！」

結局分からずじまいだよ。

…私はどんな気持ちで比企谷君を思ってるんだろう。

もやもやしたまま迎えてしまった8月8日。

私は全然眠れなかった。

約束の時間が迫り、私の心は余計にもやもやしてきてしまう。

「よう、早いな」

「うひゃあー！」

突然前から声をかけられてビックリしてしまった。

顔をあげてみれば比企谷君が正面に立っていた。

「…悪い」

「いや、全然！考え事してたから気づかなかったの」

「お、おう。危うく変な人認定されるところだったからよかったわ」

「ご、ごめんね？」

「いや、むしろ気にしないでくれ」

「…うん。じゃ、いこっか！」

「おう。で、どこ行くんだ？」

「無難にちらほかな」

「わかった」

昨日も来てるけど。

まあ、昨日とは違った楽しみかたがあるよね。

それと、もやもやのことも解決しなきゃいけないしね。

ららぽに着いた私たちはお昼を食べようとフードコートに向かった。

私は時間まで比企谷君をつれまわさないといけないのだ。

タイムリミットは今日の午後4時半、その間にお姉ちゃんと小町ちゃん準備をするらしい。

お姉ちゃんが家の場所知ってるのかって？

その質問の答えは：残念！知らないです。

だから、この前許可もらったときに連絡先交換したらしいので、連絡とりながら向かうって言った。

現在時刻は11時半、残り5時間どうしよう？

まあ、ゆつくり考えますか。

食べ終わった私たちは、まず雑貨屋からまわることにした。

雑貨といっても多くの種類がある。

とりあえず小物のコーナーへ行き、見てまわる。

ちなみにお互い無言。

だけどね、この沈黙は別に嫌いじゃない。

むしろこの雰囲気がいいのだ。

変に騒いでいるよりは『比企谷君みたいな』静かな男の子の方がいい。

？比企谷君みたいなの？

私の心の中で少し霧が晴れた感覚がする。

雑貨を見ているとふと目についたのがあった。

羽の形をしているキーホルダーだ。

これはいいんじゃない？値段も手ごろで700円ぐらいで買える。

せっかくだし4つ買ってお姉ちゃんと小町ちゃんともおそろいにしちやおう。

買うものも決まったので、比企谷君に伝えよう。

「比企谷君、ちよつと買いたいもの見つかったから待っててもらってもいい?」

「おう、外で待ってればいいか?」

「うん、お願い」

会計済ませて外に出る。

比企谷君は柱に寄りかかっていた。

「お待たせ!」

「ああ」

「次どこ行こっか?」

「テキトーにまわるか」

「それもいいかもね」

この後は2人で服とか見ながら時間を潰した。

4時半が近くなった頃、スマホが揺れた。

開いてみると、どうやら準備ができたらしい。

「よし、比企谷君」

「なんだ?」

「そろそろ比企谷君の家に行こう」

「えっ?なんで俺の家なんだ?」

「小町ちゃんに来てくれって言われたから」

「…なるほどな」

「頼めるかな?」

「へいへい」

というわけで比企谷君の家に向かう。

~~~~~

とある店より

「あれは…日代さんと……ヒキタニ?…なんだそういうことか。それなら君をヒキタニから……」

~~~~~

しばらくして、比企谷君の家に着いた。

小町ちゃんとお姉ちゃんにはもうすぐつくと連絡してある。

比企谷君がどんな反応を見せてくれるか楽しみだ。

比企谷君はドアに手をかけて開ける。

「ただいまー」

「お邪魔します」

ここまではオーケー。

問題はリビングへ入るとき。

重要なのはタイミングだ。

頼んだよ2人とも！

「小町？日代連れてきたぞ…」

パン！パン！とクラツカーの音が鳴る。

「誕生日おめでとう、お兄ちゃん」

「おめでとー比企谷君」

「」

比企谷君は驚いたまま動かない。

「比企谷くーん？」

私は比企谷君の肩をつかんで揺らす。

「…っ…なんでこんなことになってんの？」

「もちろんお兄ちゃんの誕生日を祝うためだよ！」

「…忘れてたわ」

「「自分の誕生日忘れるってどうなのさ…」」

私たちは呆れてしまった。

「まあまあ、とにかく今日は比企谷君の誕生日パーティーだよ！」

「ささっ、座って座って」

比企谷君はお姉ちゃんに押されながら席に座る。

比企谷君が座ってから私も座ろうと椅子に向かうと、

「白はこっちー！」

とか言われて比企谷君の隣に座らされた。  
うそーん、比企谷君の隣かよ。

いや、嫌とかじゃなくてむしろ『嬉しい』。  
？なんだこの感情って。

「さて、始めますか」

「ここで小町&藍さんのケーキ登場〜！」

「…おお、すごいなこれ」

出てきたのはチョコケーキだ。

なんかしかも2段になってる…。

小町ちゃんによって切り分けられたケーキがお皿にのせられる。

「よし、じゃあ比企谷君の誕生日を祝って！」

「「かんぱい！」」

「…かんぱい」

ケーキを一口に切って口に運ぶ。

っ!!うっうまい！

「おいしい！」

「…これすごいな」

「藍さんと小町でつくったからね」

「喜んでくれて嬉しいよ」

「いくらでもいけそうだよ！」

「これはコーヒーがほしくなるな」

「お兄ちゃんがそういうと思うって用意したよ」

「小町ちゃん準備がいい」

あつという間に食べてしまった。

いや、みんなで1ホールは無理だったけどね。

食べ終わってからくつろいでいると、

「さあさあやってまいりましたこの時間！」

「第1回プレゼント選手権！」

「ルールは簡単、順番にプレゼントを渡していくだけ！」

「た・だ・しそれぞれ演技をして渡してもらいます。」

なんかお姉ちゃんと小町ちゃんのテンションが高い…。



「まず、私のターン！」

お姉ちゃんが部屋から出ていく。

2分ぐらいたってからドアがゆっくりと開いた。

開いたドアからひよこつと顔だけ出して比企谷君を見ている。

じつと見たあと、ゆっくりと歩いてきて比企谷君の前に立つ。

「比企谷君」

「なっ、なんですか？」

「目、つぶって欲しいな」

比企谷君は顔を赤くして言われた通りに目をつぶる。

そしてお姉ちゃんは後ろで持っていたものを比企谷君の顔にかける。

お姉ちゃんの誕生日プレゼントはメガネだった。

「もう開けていいよ」

「そうですか。」

比企谷君はそう言われて目を開ける。

「「えっ？」」

「…？やっぱり似合わないか…」

「いやいや、違う違う！」

「比企谷君がクール系のイケメンに変身した…」

「お兄ちゃん！やればできるじゃん！」

「お、おう」

なんと！メガネで人ががらりと変わったのだ。

「こりやあビックリ。」

「日代さん、ありがとうございます。」

「いいってことよ。いいもの見られたしね。じゃ、次の人々」

「次は小町です」

比企谷君がメガネを外しているときに小町ちゃんは部屋から出るとすぐに戻ってきて、比企谷君を椅子の方へ呼び座らせる。

座った比企谷君の後ろに立ち、ハグをした。

「い、こまちっ？」

「おにーいちゃん」

「…ん」

「いつも頼りないけど、いつも助かってるよ。誕生日おめでとう」  
「ん」

机にプレゼントを置いて離れる。

比企谷君はプレゼントを開ける。

出てきたのは…写真立てだ。

「あとで撮った写真入れてね！」

「へいよ」

「最後は白さんです」

はっ！忘れてた。

どうしよう…とりあえず比企谷君の前に立つ。

今の比企谷君は椅子に座った状態なので私の方が目線が高い。

私は前屈みになって比企谷君に目線を合わせる。

「比企谷君」

「…なんだ？」

「受け取って欲しいな」

私は比企谷君にお昼に買ったプレゼントを渡す。

「開けてもいいか？」

「うん。ここで開けて欲しい」

比企谷君がキーホルダーをとりだす。

「そんなに高いものじゃないんだけどね、みんなでお揃いのものがないなって思ってたんだ」

「そうか」

「どう…かな？」

「っ！ああ、ありがとう」

このときの比企谷君の表情は笑顔だった。

この笑顔を見た私にはわかってしまった。

あのもやもやの正体。

これはお姉ちゃんの言った通り、恋心だ。

私はいつの間にか恋に落ちていたらしい。

「いやあ、これはどうですかね藍さん？」

「これは白の1人勝ちかな?」

横から声が聞こえて振りかえる。

2人はニヤニヤしながら私たちを見ていた。

私と比企谷君は顔を真っ赤にして下を向いた。

恥ずかしい!

まあ何はともあれ、今日はいいい誕生パーティーだった!

さてさて、パーティーも終わったので私とお姉ちゃんは帰る準備をして玄関にいる。

「白さん、藍さん、今日はありがとうございます」

「呼んでくれて嬉しかったよ!」

「また呼んでね」

「ぜひぜひ。あつ! そうですね白さんと藍さんは13日にある花火大会行きますか?」

「んゝ行きたいんだけど私は行けないかなあ」

「私は別に大丈夫だけど…」

「じゃあお兄ちゃんで行ってもらえますか?」

「えっ?」

今まで黙っていた比企谷君も驚いた顔をしていた。

「お兄ちゃん別にいいよね?」

「いや、まあ、俺はいいんだが日代はいいのか?」

「ここまできたならせつかくのチャンスだ、乗らない手はない。

「私はいいいよ。むしろ嬉しいし」

「おつ、じゃあ決まりだね。白、楽しんでね」

「お兄ちゃんをお願いします」

「うん」

約束が決まって、別れ挨拶をする。

「今日は2人ともありがとうございますでした」

「いいっていいって、また遊ぼうね」

「比企谷君、次は花火大会だね」

「おう。時間については連絡してくれ」

「了解。それじゃあまたね」

「おじやりました」

「ありがとうございます」

比企谷君の家を後に2人で家に帰る。

「お姉ちゃん」

「なんない妹よ」

「やっぱりお姉ちゃんの言った通りだったよ」

「そう。好きなのね？」

「うん。好きだよ」

「後悔だけはしないようにね」

「わかったよ」

私は心に誓う。

なにがあろうとも比企谷君のそばにいる。

そして裏切らないと。

決意を決めた8月8日。

空を見上げれば星が輝いている。

そんな空はいつもよりも輝いて見えた。

## 第11話 私と彼の夏休み 後編

今日の天気は晴れ

現在時刻は1時ジャスト

外で遊ぶには暑いぐらいの気温だ。

しかし、私は現在プールに来ている。

そう、いつもいるグループの人たちとだ。

この前私が連絡をしたあと、10日と決まったらしい。

メンバーは鈴木君、矢田君、姫野ちゃん、朧ちゃんといつももの感じだ。

…と思っていたときもありました。

「今日は誘ってくれてありがとう。」

なんか知らないけど葉山君がいる…。

私がよくわかってないような顔をしていると、

「ちよつとした勝負で俺が負けてね、それでこの遊びに参加することになったのさ。」

葉山君が説明してくれた。

まあ詳しいことはきくほどでもないしいいか。

「さて、なにしようか。」

「無難にウォータースライダーでしょ!」

「それだね。」

「行こうぜー。」

と言った感じでウォータースライダーのところに行きます。

どうやら乗るのは2人ずつらしい。

私たちはジャンケンで乗る順番を決めた。

そして決まったペアは

矢田君&朧ちゃん

鈴木君&私

葉山君&姫野ちゃん

という感じだ。

ちよつとばかり男の子と乗るのって恥ずかしいんだけどなあ。

ならんで待っている、前の方に順番待ちしているはずの女の子が1人である。

背の高さからして小学生ぐらいだろうか、とにかく行ってみよう。

「ねえ。」

「…なに？」

「1人で滑るの？」

女の子は首を横に振る。

「誰かと来たのかな？」

「友だちとお母さん。」

「先にいつちやったのか…。」

「…うん。」

どうやら当たりのようだ。

「1人で滑るのは怖い？」

「…。」

女の子は頷く。

「じゃあ私と滑ってくれないかな？」

「…でもお姉ちゃんあそこにいるお兄ちゃんと滑らないの？」

「いやあ、実をいうと男の子と一緒に乗るのが怖いんだ。だから、一緒に乗ってほしいな。」

「うん、お願いします。」

「よし！伝えにいこう。」

私は女の子の手を繋ぎ、鈴木君のところに向かう。

「鈴木君。」

「どうした？」

「この子が1人で滑るのが怖いって困ってたからこの子と滑りたいんだけど…。」

「お願いします。」

ペコッとお辞儀をする女の子。

鈴木君の顔を見てみるとなにか言いたそうにしていたが、すぐに笑顔になり、

「うん、その子と滑って。俺は1人で滑るから。」

「ごめんね。」

「いいっていいって。」

これでよしと。

鈴木君が前の方にスペースを空けてくれたので、並ばせてもらう。

そうだ、この子の名前聞こう。

「名前は何て言うのかな？」

「えっと、鶴見留美。」

「留美ちゃんね。私は日代白っていうの。白って呼んでね。」

「わかりました、白さん。」

留美ちゃんっていうのか、長い黒髪も似合っていて綺麗な子だな。

将来美人になることだろう。

そうこうしているうちに、私たちの番となった。

浮き輪が用意されていて、先に私が座り私の前に留美ちゃんが座る。

安全のために留美ちゃんの腰に手を回して抱きつく。

留美ちゃんはちよつと驚いていたがすぐに表情を戻していた。

大人だなあ…。

「それではいってらっしゃい。」

係員の人に押し出されて滑り始める。

少しずつスピードがはじめ、風が気持ちいい。

留美ちゃんもキヤーといいながら滑っている。

きつと楽しんでくれてるに違いないだろう。

いくつかのカーブを過ぎてそろそろ終わりが近づいてくる。

私たちは最後の衝撃に備えて構える。

バsshャーン！という音と共に終わりを告げるウォータースライ

ダー。

「ぶはっ！楽しかった！」

「そうだね！」

やはり留美ちゃんも楽しかったようだ。

私たちはプールから上がり留美ちゃんの友だち&保護者を見つけようと辺りを見回す。

「留美。」

「おっ、あの人たちかな？」

「うん。」

留美ちゃんを見つけた保護者らしき人がこちらに駆け寄ってくる。

「留美、大丈夫だった？」

「うん、この人が一緒に滑ってくれたし。」

「あっ、すみません。うちの留美をありがとうございます。」

「いえいえ、私も困っていたので助かりました。」

この後、少しの間会話をして留美ちゃんたちと別れた。

別れの際に、

「白さん。」

「なんだい？」

「またどこかで会えたら遊んでくれる？」

「もちろん！」

「っ！嬉しい！」

「うん、じゃあ『またね』。」

「うん！『バイバイ』。」

私は留美ちゃんたちと別れ、みんなのもとに向かう。

「ごめん！遅くなった。」

「大丈夫だよ。」

「鈴木君から聞いたよ、小学生助けてたらしいじゃん？」

「」

「困ってたように見えたからね。」

「さすが日代さん。」

「行動力が違うな。」

という感じで私は合流した。

「次どうする？」

「あっ、私ビーチボール持ってきた。」



「ナイス！」

「じゃあボール使って遊ぶか。」

「賛成！」

「よし、じゃあ広いところいこう。」

「どうやら次はボールで遊ぶらしい。」

私は肯定も否定もしなかったのでみんなについていく。

まあ、疲れたら休めばいいし。

とりあえず移動した私たちは円になって始めた。

そういえば思ってたんだけどさ、リア充とかつてなんかなんでもできよね。

スポーツとか初心者感が全然でないし。

そんなことを考えつつ、30分ぐらい続け、3時ぐらいになつていった。

さすがにみんな疲れたのか近くにあったベンチに腰かけて休む。

「はい。」

「ありがとう。」

鈴木君がみんなの分の飲み物を買ってきてくれていた。

鈴木君は隣いい？と聞いてから私の隣に座る。

「今日は晴れてよかったね。」

「そうだね。」

「俺、今日楽しみだったんだよね。」

「私もだよ。楽しかったし。」

「そうだね。俺も楽しかったよ。」

「なんか中身の無い会話が続いている。」

「私の返し方もよくないけど。」

「それでさ、日代さん。」

「?」なかな鈴木君。」

「よければなんだけどさ、13日の花火大会一緒にどうかな?」

ああ、鈴木君このために私のところに来たのか。

で、なかなか話せずいたということか。

でもその日はもういく人が決まっているから断らなきやなあ。

「ごめんね鈴木君、その日は他の人といく予定でさ…。」

「いや！いいんだ、もし空いてたらと思ったから…。」

「うん、ほんとごめん。」

「気にしないで。」

「なんか気まずい。」

「今すぐここから逃げたい。」

「…。」

「戻ろっか。」

「そうだね。」

私たちは無言のままみんなのところに戻る。

戻った私たちは2時間ぐらい遊び、解散となった。

別れ際に鈴木君がなにか決意した顔をしてたけどなんだったんだろう。

さて、13日の夕方5時前、私は駅前にいる。

私はお姉ちゃんに着付けられて浴衣でいる。

私的には動きにくいのであまり好きではないのだが、お姉ちゃん曰く

「せっかくの花火大会なんだから着てけ！そして比企谷君に見せつけてこい！」

と言われてしまったのだ。

こういわれてしまうとどうしようもないので、着てきてしまった。

まあそんな日があってもいいだろう。

「毎回早い日代。」

横から声をかけられる。

声で比企谷君とわかるのももう驚かない。

「今日は浴衣だったから早く出ようと思ってね。」

「そうか。」

「どうかな？」

「…ん、まあ似合ってるぞ。」

「ありがとう。」

「じゃあ行くか。」

「うん。」

私たちは電車に乗り、最寄りまで向かう。

電車の中は混んでいたが、比企谷君はさりげなく私を守ってくれていた。

やはり比企谷君は優しい人だ。

どれくらいか時間がたち会場近くの駅に着いた。

会場までの道のりも人がたくさんいる。

私ははぐれないように比企谷君の手をつかむ。

「日代?!」

「いや、はぐれないようにいいかなあと思って。嫌だったらいいんだけど。」

「…別に。」

「そうーありがとー。」

なんだかんだやはり優しい。

会場まで15分ぐらいでつき、時間は6時20分ぐらいになっていた。

花火が始まるのは7時なのであと40分くらいだ。

「比企谷君どうする?」

「そうだな…軽くなにか買っておくのがいいんじゃないか?」

「そうだね、比企谷君はなに食べたい? 私は定番の焼きそばが食べたんだけど…。」

「俺も焼きそばかたこ焼がいいんじゃないかと思ってたし焼きそばにするか。」

そうと決まれば屋台に並ぶ。

ここでも比企谷君ポイントが。

さりげなく屋台側に私を並ばせてくれる。

人混みが多いので通路側は並びづらいのだ。

私はちよっぴり嬉しくなってしまった。

「ちっしやいー焼きそばいくつ買うんだい?」

「2つお願いします。」

「あいよ。2つで800円な！」

「1000円をお願いします。」

「200円のおつりと焼きそばな！ちよつとばかしサービスしといたぜー！」

「ありがとうございます。」

屋台の人特有のテンションと対応を見つつ焼きそばを購入。

「比企谷君お金…。」

「ああ、気にすんな。今日ぐらいは俺が出すよ。小町に怒られそうだし。」

「やはりシスコン。」

「いいだろ別に…。」

会話をしつつ移動して、花火の見えそうな芝生の傾斜部分のところに腰をかける。

周りにも人がそれなりにいる。

汚れを気にしないのかって？

残念！2人用のシート持ってきてきました！

比企谷君も遠慮がちに隣へ腰かける。

人混みのなかを移動したので疲れてしまった。

私は呼吸を整えつつ花火が始まるのを待とうとすると、  
ぐうぐ

うん。私のお腹がなった。

恥ずかしい！これでも乙女だから！

「まあ、なんだ…焼きそば食って待ってるか。」  
「…うん。」

比企谷君から焼きそばを受け取り食べる。

恥ずかしさをまぎらわすのにも無心で食べる。

食べる食べ…ムグッ！

「ゴホッゴホッ！」

「大丈夫か?!」

「ゴホッ…むせただけだし大丈夫だよ。」

「気を付けろよ、ほら。」

比企谷君からお茶までもらってしまった。

「ごめんね。」

「だから今日ぐらい気にすんなって。」

「じゃ、ありがとう。」

「ん。」

突然バーンという音が聞こえ、振り向けば花火が上がっていた。どうやら7時になっていたらしい。

私たちは花火を眺めつつ夏のひとときを過ごす。

これもまた夏の思い出出ってやつですかね？

30分ぐらい花火がうち上がり終わりを告げる特大花火が上がった。

綺麗だったな。

隣を見てみればあるとき本を読んでいたときの表情をしている比企谷君がいた。

その笑顔をみたら楽しいことが一瞬でわかる。

ああ、もつとこの時間が続けばいいのに。

だが、時間はとても無慈悲なのだ。

「さて、帰るか。」

比企谷君はいつもの顔になっていた。

「そうだね。」

シートをしまい、2人で帰り道を歩く。

丁度駐車場の近くを通ろうとしたとき突然後ろから声をかけられる。

「日代さんー！」

「…鈴木、君？」

鈴木君がいた。

花火大会だから来ているのは不自然ではないが、どうみても表情がおかしい。

「どうしたの？」

「今日ヒキタニと来ていたんだね。」

「そうだけど…。」

そう答えると鈴木君はぶつぶつなにか言い出した。  
そして、

「日代さん、今君を救ってあげるよ。」

「えっ?」

鈴木君はカッターをとりだし、比企谷君の方に走ってきた。

私は比企谷君に手を引かれ、比企谷君の後ろに移動させられる。

私は怖くなり比企谷君の背中にしがみつく。

「くたばれヒキタニ!」

私には鈴木君が見えず怒りの声だけが聞こえる。

「グオツ…!」

比企谷君の声が聞こえる。

「お前さえいなければ!お前さえいなければ日代さんは俺のものだったのに!」

「…うる…:…せえ…:。」

「何もかも失敗したよ。だからお前を消してやる!」

鈴木君が叫ぶ。

「はーい、ストップストップ。」

「えっ?」

突然知らない女の人の声が割り込んでくる。

おそろおそろ覗いてみると

スーツの人に取り押さえられている、鈴木君と比企谷君の前に女の人  
がたっていた。

「誰だお前、離せ!」

「だめだめ、君はもう終わったんだから。」

とても冷たい目をしていた。

「遅いですよ…:雪ノ下さん。」

「いやあ、確実な証拠がいくつか欲しかったし、比企谷君の目ならなんと  
とかできるかなと思ってね。」

「この目にどんな力があるっていうんですか…:。」

「ん、人を観察する能力とか…:ね。」

「…。」

「あの。」

私は女の人に話しかける。

「ん？ああ、君が日代ちゃんか。」

「そうですね、あなたがあなたは？」

「私は雪ノ下陽乃、比企谷君とは…なにかなあ？」

「協力関係でいいでしょうよ。」

「えーつまんなーい。」

「日代、この人は俺が事故ったときの関係者だ。で、事故をなくす代わりに貸しつていうことになったらしい。」

「じゃあ面会謝絶だったのも？」

「そういうことだ。」

「比企谷君。」

「何ですか、雪ノ下さん。」

「こいつの処分は私に任せてもらってもいい？」

「はい、任せます。」

「りよーかーい、よし！つれてっちゃって。」

スーツの人が鈴木君をつれていく。

取り残された私たち3人。

「さて、ネタばらしの時間だよ。」

「…。」

「私は比企谷君の入学式の日に事故を起こした車の関係者で、その事故を無くすために比企谷君に提案したんだよ。」

「最初は自分から飛び出したので自業自得ですと言ったんですけどね。」

「まあなんでもない人ならそれでもよかったんだけどね。比企谷君は私のことを1回で暴いたから興味がでちゃった。」

「それで貸しということ手で手をうって、代わりに事故をなくしてもらったってわけ。」

雪ノ下さんは「保険で面会謝絶にしてもらったけどね」と付け加えた。

「それでこの前比企谷くんから連絡がきて、調べてほしい人がいるって頼まれた。そしてそれが…」

「鈴木君だった。」

「正解。」

「確かに調べたら色々でてきたよ。権力のある親を理由に結構なことしていたらしいし。だから今回仕掛けてくると思って比企谷君と相談して捕まえることにした。」

「結果は見ての通り上出来、比企谷君は手にタオル巻いてたから怪我もないし。」

「ほんと危なかったですけどね。」

「これで事件の説明は終わり、なにか質問は？」

「私はいくつか気になることを質問した。」

「ならいくつか。まずいつからその話を？」

「終業式の日かな、だからプールのときに隼人に監視お願いしたし。」

「葉山くんがいたのはこれだったのか。」

「じゃあ、比企谷君にいつから鈴木君が危ないと思ったの？」

「ぼっちは人間観察が得意だからな、1学期中旬辺りか。」

「じゃあ最後に2人に、どうして捕まえようか？」

「俺のせいで日代を巻き込むのが嫌だっただけだ。すべてにおいて俺に責任が来ないようにするためだ。」

「私はちよっと大人の事情のためにな。ライバルの会社が減れば楽だし。」

「私の知らないところでこんなことが起きていたのか。」

「鈴木君は相当な罰を受けるだろう。」

「じゃ、私は帰るね。」

「ひらひらと手を振って雪ノ下さんは帰ってしまった。」

「俺たちも帰るか。」

「…うん。」

「私たちは無言のまま最寄りまで帰る。」

「駅に着くと」

「日代、もしよければだが…送ってくが…。」



「お願い。」

「…おお。」

比企谷君とならんで歩く。

どれくらいか歩き、家の前に着く。

「比企谷君、ありがとう。無事に着いたよ。」

「そうか、じゃあな。」

「待って。」

私は比企谷君の服を掴んで止める。

「なんだ？」

「比企谷君本当の理由隠してるでしょ。」

「…。」

「沈黙は肯定だよ。」

「まあ、なんだ、俺のせいで日代が危ない目にあっただけなのは本当のことだ。」

「私は比企谷君が危ない目にあうのは嫌だよ。」

「俺はそれよりも守ることを取ったってだけだ。だから…俺が言いたいのは…。」

「うん、ありがとう。比企谷君のおかげで助かったよ。」

「ん。そういうことだ。じゃ、俺は帰るぞ。」

「うん、私から最後に…。」

「なんだ？」

「ここで告げてしまおう、比企谷君に。」

「今しかない。」

「ここで逃したらいつになるかわからない。」

「私は比企谷君のことが大好きだよ。」

「！」

「比企谷君はきつと勘違いっていうかもしれない。でもね、私は私のことを一番知ってる。だから比企谷君に伝えたんだ。だから私と…付き合ってください。」

「…俺でいいのか？」

「比企谷君だからだよ。」

「めんどくさいぞ。」

「どんとこいだよ。」

「…まいった、降参だ。」

「じゃあ！」

「こんな俺でよければ。」

「！嬉しいよ！」

私は比企谷君に抱きつく。

「ああ。」

「比企谷君は私のことどうなの？」

「嫌いだったら付き合わないだろ。」

「つまり」

「…す、好きだ…。」

思わず腕に力を込める。

嬉しい。

そんな感情にひたっていると、

ガタツ

「!!」

「あちゃー、ばれたか。あついね2人とも！」

「<!!」

「…。」

見られてた、一生の不覚だわ。

「じゃあ俺は帰るぞ。」

「うん、じゃあね八幡！」

「！ああ、し、白。」

比企谷君はそう言って帰る。

私はお姉ちゃんににやにやされながら家に入った。

もちろんしつかり話しましたよ。

やはり姉には逆らえない…。

## 第12話 私と彼の新たな始まり

朝日が差し込み眠りからさめる。

私はベットから起きて伸びをする。

おはようございます、日代白です。

私は昨日八幡に告白しました。

結果としては付き合えることとなった。

よかった反面、恥ずかしさがヤバイ。

どれくらいヤバいかってというと、ベットでゴロゴロからの枕で顔を隠すぐらい。

あ、違うヤバさで言ったら、昨日お姉ちゃんに一部始終を話したら、「ちよつと鈴木ってやつをぶっ飛ばしてくるかな。」

とか黒いオーラが見えるぐらいキレて行こうとするから止めるのが大変だった。

そんなことを振り返りつつ、私はとりあえずベットから降りてリビングに向かう。

眠い目を擦りつつドアを開ける。

「おはよう白。」

「…よう。」

「うん、おはようお姉ちゃん、八幡。」

ん？なにか変だぞ？

まず時間、時計を見ると10時。

そしてリビングを見渡す。

お姉ちゃんがいる。これは普通。

隣に視線を移す。

八幡がいた。

「えっ！八幡なんで?!」

「ふっふっふ、それは私が答えよう。それは私が呼んだからさ！」  
ラスボス感満載の言い方だった。

「えーと、だな、白…出来れば、その…うん、着替えてくれると…。」  
「そういわれて私は思い出す。」

私の格好は短パンにTシャツというきわどい格好？だ。  
多分八幡にはきわどかったのだろう。

「ご、ごめん！ちよつと待っていて！」

私は急いで部屋に戻り服を着替える。

深呼吸をして落ち着いてからリビングに向かう。

「おまたせ。」

冷静、冷静、平常心が大切だ。

「いやあ、朝からいい反応が見れてよかったよ。」

「このやろー！」

私はお姉ちゃんに飛びかかる。

冷静とかは一瞬で消えた。

「甘いな、八幡君の盾！」

「へぶっ！」

お姉ちゃんが八幡の後ろに隠れたので、私は八幡に飛び付いてしま  
う。

八幡のにおいがするよう。

「えへへ。」

「おい八幡君、うちの妹は変態になったらしいぞ。」

「そ、そうですか…。」

「むっ、そんなことないよ！」

「まあ、そんなことは置いておくとしてと。」

「ちよつと！」

「朝に陽乃さんから連絡がきてね、それについての報告をしようか  
と。」

「そのためですかあ、藍さん。」

「待って、何で2人とも名前呼びなの？」

今さら気づいたけど…。

「いや、だって白も呼んでるんだから私も呼んでってお願いしたの。」  
「むう、そういうことなら仕方がない…。」

潔く納得するとしよう。

「それで連絡についてなんだけど、彼はとりあえず退学。そして、彼の親の会社は倒産寸前までなるらしい。今のところはニュースになってないけどそのうち報道されるって。」

「…そうですか。」

「まあ、それぐらいはなると思ってたかな。」

「で、陽乃さんが近々訪ねてくるらしい。」

「えっ。」

あの人が訪ねてくるの？

なんか怖くない？あの人。

だって笑ってるのに全然笑ってないじゃん。

「あの…強化外骨格魔王が来るのか…。」

どうやら八幡も同じ事を考えているようだ。

「ほほーん、比企谷君は私のことそうやって呼んでたんだ。」

「!!」

突然後ろから普通は聞こえるはずのない声が聞こえ、八幡と同時に振り向く。

「なんで雪ノ下さんがここに…?」

「今藍が言ったじゃない、近々訪ねてくるらしいってね。」

「いや、いくらなんでも早すぎでしょうよ…。」

まったくだ。

近々っていう早さじゃないよね。

「まあ今はおいといて、私が来た理由はね…特にないよ。」

「」

理由ないの？

「まあ、反応が見たかったから来たって感じかな。比企谷君呼んでもらった理由も大部分がこれだしね。」

「そうなんですか…。」

確かにあのぐらいなら電話とかでもよかっただろうし。

なに考えているかほんとに読めないなあ。

「そうだ！せっかく4人いるわけですし遊びましょうよー!」

「おつ、その言葉待ってたよ藍。」

「これもあれですか、計画のうちですかね？」

「いや、少しばかりは反抗してみよう。」

「拒否権があるなら行きたくないのですが…。」

「あるわけないじゃない！行くよ！」

「終わった…何もかも。」

この日、めちやくちや姉と雪ノ下さんの2人に振り回された。

時は過ぎて新学期。

あれ以来特に大きなことは起きず、夏休みは過ぎていった。

「私の」変わったことといええば八幡と登校するってことぐらいかな。

八幡は自転車なので歩いてもらうことにはなるけど…。

「私の」を強調したのには訳がある。

それは…

「すまん、待たせた。」

「ううん、別に待ってないよ。」

八幡の外見が少しだけ変わったのだ。

そうそれは、あの振り回された日に起きたのだ。

~~~~~

それは別れ際。

陽乃先輩が真剣な表情でこれからのことを伝えてきた。

陽乃先輩呼びは途中で言われた。

「もう少ししたら新学期が始まるけど、君たちは早く公に付き合っていることを広めた方がいいよ。何かあってからじゃ遅いから。」

「…そうですね。」

「はい…。」

「だからお姉さんからのアドバイスをあげよう。」

「は、はあ…。」

「まず1つ目、比企谷君は猫背を直すこと。」

「…はい。」

「2つ目は最初の日だけメガネをかけること。」

「?…どういうことですか?」

「比企谷君はメガネかけるとイケメンらしいじゃない。だからその印象を与えて敵の抑制に使おうって話。この前みたいなことが起きないようにね。そしたら次の日からはメガネを外してもOKってこと。」

私たちは無言で頷く。

「最後に3つ目、これも当日なんだけど付き合っていることを周りに伝えること。これは言わなくてもわかるよね?」

「はい。」

「なら大丈夫。それじゃあまたね。」

~~~~~

ということがあったのだ。

そんなわけで八幡の姿が今日は変わっている。

残りの夏休みは猫背を直すために力を注いだ。

おかげで今となつては背筋も伸びて印象がガラリと変わった。

そしてメガネをかけているのでとてもカッコいい。

いや、八幡の姿はどんなときもカッコいいけどね。

心配なのは他の人にモテないかってことぐらい。

おっと、考えてばっかりだと遅刻するね。

「じゃ、行こっか。」

「おう。」

私たちは学校に向かう。

八幡は自転車なので押して歩いている。

学校が近づくにつれて人も増えてくる。

必然的に視線の数も増えるけど明らかにおかしい。

なんかみんな私たちを見ている。

隣を見てみると、八幡もそう思っているのか居心地が悪そうにしている。

いや、ここで負けたら終わりだぞ私！

決まったなら徹底的にだ！

そんなことを考えつつ、学校に到着した。

うわっ、視線があ！

視線の嵐を受けながら八幡と自転車置き場に向かう。

自転車置いたのでゆつくりと校舎へと歩き出す。

校舎に近づくとやはり視線が集まる。

若干の緊張と恥ずかしさを感じながら嵐の中を歩く。

校舎に入り、靴を履き替える。

その時に、姫野ちゃん和朧ちゃんが私に気づいたんだけど、八幡を見ると声がかげづらかったのか先に行ってしまった。

きっと後で聞かれるだろう。

だからその瞬間がチャンスといってもいい。

「八幡、覚悟は決まったかな？」

「ここまで来たら決めるしかないだろ。」

教室の前でそんなやり取りをする。

「じゃ、行くよ。」

「へいへい。」

ガラスと戸と開けて2人同時に入る。

なんか私たち見た途端みんな騒ぎだした。

八幡は一瞬驚いていたが何も気にせずに席に向かう。

私も席に向かうと姫野ちゃんと朧ちゃんが慌てた様子で来た。

「あのイケメン誰！」

「なんか一緒に登校してたよね?!」

うん、予想通り。

私はあらかじめ考えていた台詞を言う。

「あれは八幡だよ、比企谷八幡。私の彼氏。」

2人はその台詞を聞くと

「えええええ!!」



さらに驚いていた。

周りを見渡すとみんなも言葉は発していないが驚いた顔をして  
いた。

「あれがヒキタ、比企谷だつて?」

「完全ダークホース過ぎるでしょ。」

「それよりも日代さんに彼氏ができたつて?」

「俺狙つてたのに…。」

おおう、なんかひそひそ話し始めたクラスメイト。

まあ、結果としては大成功かな。

ざわざわの中、先生が来るとみんな慌てて席に向かう。

みんな授業が始まっても落ち着きがなかった。

時は流れてお昼。

今日は八幡のいつも食べている場所でお昼を食べることにした。

今日はお昼がないんだけどね。

「どーだったよおふたり?」

そしてお姉ちゃんもいる。

まあ元から結果報告のために約束してたから。

「結果としては成功だと思う。」

「そうだな。」

「うん、何せ3年まで噂が回ってたからね。」

マジかよ、噂はや!

「よかったじゃない作戦成功つてことで。」

「…まあね。」

「八幡君は当分大変そうだけどね。」

「うっ…。」

「まあ悪いようにはならないと思うから。」

「そうならないことを祈りますよ…。」

そんな会話をしつつ、今日の成功を祝ったお昼だった。

いつものお昼より楽しかった。

お姉ちゃんは用事があるらしく、2人で歩く帰り道。

えっ? 展開が早いって?

しようがないよね、特に語ることはないし。

八幡と歩いてる方が重要だからね！

「今日は大変だったね。」

「ほんとにな。これつきりにして欲しい…。」

「どう考えても無理だけどね。」

「…。」

あれだけの影響があったのだ、そう簡単に噂はなくならないだろう。

「けど私としては嬉しかったよ。八幡のことを皆がちゃんとした目でみられるようになって。」

「そうか。」

「けど八幡は…私のだから渡さないけどね。」

「…。」

めっちゃ恥ずかしい。

八幡も顔が赤い。

「そ、そういえば文化祭がもうすぐだね。」

「そ、そうだな。」

「うちはなにやるかな？」

「わからんがあまり面倒なのはな…。」

「そうだね、失敗しても嫌だし。」

「だから無難かつ仕事が少ないのを希望する。」

「ぶれないね。」

「そりゃあ俺だからな。」

「ふふっ。」

ああ、楽しい、そして幸せだ。

あるとき八幡に出会わなければきつとこんな時間は過ぎせなかつただろう。

周りに合わせて生きるそんな自分のまま。

この夏休みまでの間に私は変わった。

私はこの変化を嬉しく思う。

きつかけをくれた八幡。

これから八幡が幸せになれるように共に歩いて行こうと心に誓う。

まだまだ先は長いからゆつくりと。

## 第13話 私と彼の文化祭

### 文化祭

それは2学期を代表するイベントである。

学校の雰囲気は文化祭一色となり、青春を謳歌するための必須な行事である。

文化祭特有の空気は生徒の気分を変えるだろう。

そして私は今、

ステージに立っている。

聞こえる歓声。

鳴りやむことのない拍手。

…ナニコレ。

なんでこんなことになったのかというと、すべての始まりはお姉ちゃんと陽乃さんの一言から始まった。

~~~~~

とある休日

日代家に八幡と陽乃先輩が遊びに来ていた。

特に理由はないらしく、ただただ集まっただけのようだ。

私と八幡はリビングのソファで本を読んでいる。

陽乃先輩とお姉ちゃんは椅子に座ってしゃべっている。

ああ、平和だ。

この平和が続いてくれればいいのに。

…フラグや、これ絶対フラグやで。

「そーいえばもうすぐ総武高校は文化祭だよね。」
「そうですね。」

おっと、なんかあちらで流れが変わったぞ。

「そーいえば私が実行委員長のとときにバンドしたよねえ。」

「ありましたね。あれは確かに盛り上がりました。」

私は八幡の方を見る。

どうやら八幡も同じことを考えていたらしく、冷や汗をかいていた。

「藍、今年の文化祭はどうなりそう?」

「今のところ問題はないらしいですけど、有志が少し足りないそうです。」

「ふむふむ、足りないのかあ。」

チラツとこちらを見た陽乃先輩。

目があったので思わずそらしてしまう。

イヤだ、絶対何かある!

ここは戦略的撤退だ。

私は立ち上がって部屋を出ていこうとする。

しかし、

「おいおいマイシスター、どこへ行くこうというんだい?別に用はないんでしょ?」

「そ、そそそんなことないよ?!」

「ははは、…座りなさい。」

「…ハイ。」

結論、逃げ場はなかった。

「よし、じゃあ今年もバンドやろうか。新しいメンバーを加えて。」

「やりましょう。陽乃さんが有志に出られるように手配しておきますよ。」

「よろしく。静ちゃんとめぐりに声をかけておくのは私がやるよ。」

「お願いします。」

話が進むのが早いよお…。

「で、二人にだけど…」

「ひゃい！」

二人とも囁んだ。

だって怖いじゃん。

「とりあえず文化祭まで練習してもらおうから。それも…死ぬ気で。」
終わった…。

私、文化祭まで生きてるかな…。

~~~~~

と、いうのが約3週間前です。

文化祭の準備が始まって少し過ぎたぐらいのはず。

それからは確か…

~~~~~

陽乃先輩に連れてこられ、スタジオに来た。

話によると、この部屋文化祭まで貸し切りにしたらしいよ。

どれだけのお金かかったんだろう…。

「おつ、先に来てたのか二人とも。流石、静ちゃんとめぐりだねえ。」
陽乃先輩は先に来ていたらしい二人に声をかける。

「まったく、私はこれでも忙しいんだぞ…若手だから！」

「またはるさんとバンドできるって言われたら行きますよ。」

二人とも個性が強そうだなあ。

「おつと忘れてた。私から紹介しようか。こっちは静ちゃんこと平塚静。総武高校の国語教師だよ。」

「よろしく頼む。」

「で、こっちが城廻めぐり。比企谷君と白ちゃんよりも1つ上の総武高生だよ。」

「よろしくね。」

「そしてこちら、今回新しいバンドメンバーとして藍の妹の白ちゃんと、その彼氏こと比企谷八幡君だよ。」

「よろしくお願いします。」

自己紹介が済むと、私たちの役割を決めることになった。

「比企谷君と白ちゃん以外は前と同じで行こうか。めぐりがキーボード、静ちゃんがベース、藍がギターで私がドラムだよな?」

陽乃先輩は確認のために周りを見る。

私と八幡以外は頷いて返事をする。

「そうだなあ。折角だし白ちゃんにはボーカルやつてもらおうとして…」

「ええっ!」

なんで私がそこ?!

私としてはもつと目立たないようなところがいいんだけど…。

「理由としては大体役割が決まってるからつてのが大きいかな。それに藍に聞いているよ、歌が得意らしいじゃない? だったらやらないともつたないじゃない。」

どう考えても陽乃先輩とかの方が上手いでしょうが! と言ってしまえばいいが、ギリギリ心の中に押し留める。

まあ、確かに役割が元々決まってるので、私ができるのはその辺になってしまおうだろう。

「わかりました。期待に答えることができるかはわかりませんが、できる限りのことをします。」

「大丈夫よ、私がいるからできる限りじゃなくできるにしてあげる。」
はっはっは、こういう人だったわ。

「で、次に比企谷君だけど…」

と、陽乃先輩が八幡の方を向くと…丁度逃げようとドアに手をかけているところだった。

声をかけられた八幡はビクツとなつてからゆっくりとこちらを向いた。

「逃げようとはいい度胸だね。お姉さん許さないよ?」

「い、いや、にに逃げようとなんてしていませんよ?!」

陽乃先輩の鋭い視線が八幡にクリティカルヒット!

八幡はカミカミだ!

まったく逃げようとするからこうなるんだよ。

「私から逃げられると思ってているなら諦めなさい。私を本気にさせたら怖いよ?」

「い、イエス!」

やはり私の八幡は強者には勝てないようだ。

「まあいいや。とりあえず役割を決めちゃおう。比企谷君は何か楽器とか持つてる?」

「親父が買ってきたギターなら家にありますけど…。」

「なら藍のサブでギター、そして白ちゃんと一緒にボーカルやってもらおうかな。」

「そんな…。」

「私から逃げようとするからよ。ギターはサブだから気にしなくてもいいけど、ボーカルはそれなりにやってもらうからね。」

「はい…。」

「よし、役割も決まったし早速練習しようか。曲についてはいくつ候補があるからそこから選んでいこう。」

役割が決まるとあとはすいすいと決まっていき、残りは練習となった。

~~~~~

この後は普通に平日は学校に行って、放課後文化祭準備をする。

で、終わったらバンドの練習。

陽乃先輩の車で送ってもらう。  
の繰り返しだったなあ。

なんていままでのことを振り返っていたら

「続いてメンバー紹介!」

陽乃先輩の声が後ろから聞こえてきた。

おっと、本番なこと忘れてた。

振り返っている場合ではない。



「まずはドラムの私とギターの藍！」

お姉ちゃんが紹介され、ギターを鳴らして紹介に応える。

「キーボードのめぐり！そしてベースの静ちゃん！」

二人も同じように応える。

「さらにさらに、今回新メンバーの白！その相方の八幡！」

名前を呼ばれたので隣にいる八幡に視線を向け、合図を出す。

ちなみに八幡は文化祭という事でメガネにオールバックというスタイルだ。

八幡は頷いて返事をする。ギターを鳴らし、

「どーも」

「どうも！私白と八幡です！よろしくお願ひします！」

「以上の6人でいくからよろしく！」

メンバーの紹介が終わるとまたもや大きな歓声が。

凄いなーコレが文化祭テンションかあ。

何気に総武高ってノリいいよね。

「それじゃあワン！ツー！ワンツースリーフォー！」

かけ声とともに始まる陽乃先輩のドラム。

ドラムを支えるように弾かれるお姉ちゃんのギター。

さらにほんわかとゆっくりだけど遅れをとらないめぐりさんのキーボード。

先導するように引つ張られるような音の平塚先生のベース。

隣には遅れまいと必死に食らいつく八幡のギターの音。

なら私だって精一杯やってやろうじゃないか！

私は息を吸って歌い出す。

「~~~~~♪」

「~~~~♪」

八幡も歌い出し、私たちのバンドは完成へと向かう。

湧き上がる客席。

照らされる私たち。

それはひとときの青春だった。

こうして私たちの文化祭は幕を閉じた。  
余談だが、後にこのときの光景は何年も語られることとなった。

## 第14話 私と彼の日常の一コマ

文化祭が終わり、私の高校生活もすでに半年を迎えた。思い返せばこの半年は色々な事があった。

私としては結構気に入っている。

楽しい日々も過ぎてしまえば儂いものだったと思ってしまうのだろう。

人生の中で起きることはその瞬間しか味わえない。

だから私は少しのことでも大切にしていきたい。」

「語るねえ。」

「…声にでてた?」

「そりゃあばつちり。」

「どうやらしゃべっていたらしい。」

「内容はよかったかと。」

「別に評価しなくていいから。」

「へいへーい。おつとここまでだね。今日も頑張るように。」

「はいよ。」

お姉ちゃんと別れて教室へ向かう。

教室に入ると、おはようと声をかけながら席に荷物を置く。

教室内を見回し目的の人を探す。

…おつ、いたいた。

私は駆け寄り、

「八幡おはよう。」

「おう。」

八幡に声をかけた。

文化祭が終わってから八幡はクラスの人から声をかけられることが大幅に増えた。

やはりステージに立ってしまったのが大きな原因であった。

でもおかげで男女問わず人気がでている。

なんでも、普段とのギャップがすごいとか、寡黙そうだったが話してみると面白いとかなんとか。

特にあの戸塚君！

男の子なんだけどすごい可愛い。

戸塚君可愛いを略してとつかわいい。

マジ天使レベルで純粹だし。

私でもちよつと嫉妬するほど可愛い。

でも、八幡は渡さないよ！

いかんいかん、話がそれてしまった…。

今は八幡に伝えなければいけないことがあるのだ。

「今日の放課後さ、お姉ちゃんの誕生日プレゼント買うのに付き合っ  
てほしいんだけど…。」

「ああ、大丈夫だぞ。」

「ありがとう。」

そろそろお姉ちゃんの誕生日だしプレゼントを買わなければなら  
ない。

お姉ちゃんも八幡とか小町ちゃんとか来るのを楽しみにしている。

去年と違って賑やかになりそうだ。

「席につけーい。」

ガラスと扉が開かれ先生が入ってくる。

「じゃ、あとでね。」

「おう。」

私は八幡との会話を止めて自分の席につく。

みんなが席につくと先生はプリントを配る。

「もうすぐ生徒会選挙がある。みんな興味ないかもしれないが、1年  
間の学校生活のためにしっかりと配ったプリントを確認しておくよ  
うに。」

先生からの話の通り、もうすぐ生徒会選挙がある。

生徒会選挙は結構地味で興味がないっていう人が多いだろう。

実際のところ私もあまり興味がない。

だが、今年の生徒会選挙には文化祭で一緒にバンドをやった城廻先輩が会長候補としてでている。

その話を聞いたときに私達もどうかと聞かれたが急な話だったので断らせていただいた。

断ったときの城廻先輩のシユン…とした表情にはとても申し訳ないと思っていた。

あの顔はズルいよ。

めっちゃ心痛かったし、罪悪感やばいし。

ほんとすみません！

思い返しては心の中で謝ってしまうほどに印象的だった。

数学、英語、現代文からの体育という時間割を終えて、お昼休み

今日はベストプレイスで私、八幡、お姉ちゃん、城廻先輩の四人だ。

「いやあそろそろ寒くなってきたね〜。」

「そうだねえ。ここ落ち着くんだけどね〜。」

「まあ、初めは3年間ボツチのつもりだったので…。今は今で楽しいからいいんですけど。」

「…八幡。」

なんとということだ。

あまりデレない八幡がデレた。

「八幡君がデレるなんて…。」

「これは…捻デレだね！」

「いや、なんでその言葉知ってるんですか。…最近学校だと人に話しかけられることが増えたんで落ち着くのがここしかないって感じですよ。」

どうやらお姉ちゃんたちも同じことを考えていたらしい。

「悪い変化ではないと思うしポジティブにいきましょうぜ八幡君！」

「そっだよ！比企谷君はそれだけ人気なんだよ！」

「…う、うす。」

二人の励ましに何とも言えない表情をする八幡。

「こは私も何か言うべきかな？」

「ほら、戸塚君という友達もできたじゃん！」

「そうだなー！」

キリツとした表情で私に向かって答える八幡。

その反応のせいとか、私は八幡をジトーと見てしまう。

「い、いや、ほほらー！あれだぞ？いい友達ができたってことで言ったわけ…決して癒し系とか、天使とか思ってるわけじゃー！」

「まあ、戸塚君が天使なのはわかるけど。」

「だよなー！」

「二八幡（君）（比企谷君）…。」

「…。」

全員一致して八幡にジトーとした目を向ける。

「何かーつ言うこと聞くので許してください…。」

視線に耐えられなくなったらしい。

ほほーん、ならそうだなあ…。

私たちは目線で合図を送り、

「じゃ、私は明日みんなの分の飲み物奢りで！」

「私は今度の日曜日みんなで出かけるで！」

お姉ちゃん、城廻先輩という順番でいい、そして私の番となった。

私は笑顔で、

「私は平塚先生の鉄拳制裁でよろしく！」

「」

昼休みの最後に平塚先生から鉄拳制裁を受けた八幡でした。

放課後、私は八幡と一緒にお姉ちゃんの誕生日プレゼントを買いに

来ていた。

「いや〜いい拳だった。」

「マジ痛かったわ。もう勘弁してほしいぜ。」

「自業自得だったからしょうがないでしょ。」

「…ソウデスネ。」

「それは置いといて、お姉ちゃんの誕生日プレゼントを選んでしまおう。」

「了解。」

行き当たりばったりで店に入っては出て店に入っては出てを繰り返す。

返す。

なかなかコレ！ってのが見つからない。

「次ここ入ろう。」

「あいよ。」

一つ一つ手に取るが…うーん。

いまいちピンとこないな。

「これなんかどうだ？」

後ろから八幡に声をかけられ振り向くと

「こ、これは…人をダメにするクッション！」

そう、人をダメにするクッションを持った八幡がいた。

「これをどこで!？」

「いや、偶然店の隅の方に行ったらあった。」

ぐ、偶然でこんないいものを!？」

流石すぎる。

「八幡はいいの？私としてはそれをプレゼントにしたいけど八幡はプレゼントどうするのさっ。」

「俺はもう別なのを用意しているからな。別に気にせんでいい。」

「…なん…だ…と…。」

「いや、そこまで驚かなくても…。」

「そうだね。オーバーリアクションだったよ。じゃあ、私がそれ買っていいかな？」

「おう。」

クッションを受け取り会計へ向かう。

レジの店員さんにリア充めえ…みたいな目を向けられたのはスルーしておこう。

帰宅した私はバフツと音をたててベットに沈む。

ああ、今日もいい日だった。

明日は何が起こる？

悪いこと？それともいいこと？

悪いことは起きないで欲しいなあ。  
八幡の周りは日々変わっていく。  
でも、八幡と過ごせればそれだけで心が落ち着く。  
これはこの先も変わらないだろう。  
だからこそ、私は八幡を愛し続ける。  
ああ、明日もいい日であれ！

~~~~~

後日談1

「会長就任おめでとう！」
「おめでとうございませす。」
「ありがとう。これから私頑張るよ！」
お姉ちゃんが祝いの言葉を言い、私と八幡が続く。
「でも…。」
「「？」」「」
城廻先輩の表情が笑顔から悲しみに変わる。
「二人と生徒会したかったなあ…。」
「ホントすみません！」

後日談2

「誕生日おめでとう！お姉ちゃん。」
「ありがとう妹よ。」
「今日はみんな来るからね！楽しみにしててよ。」
「今年は賑やかになりそうだ。」
「そりゃあみんな来るからね。」
「妹からのプレゼントも期待してる。」

「ふっふっふ。任せておいてよ。」

この後、プレゼントした人をダメにするクッションでお姉ちゃんはだるーんとなるほどダメになっていた。

第15話 私と彼らのクリスマス 前編

クリスマス

それは12月を代表する特別な日である。

また、評価は人によつて様々だ。

ある者は楽しみと言い、ある者はリア充を妬み、ある者はただただいつもと何も変わらないという日である。

私こと日代白はどのような日であるだろうか？

クリスマスについて考えると、真っ先に浮かんだのは八幡の姿。それだけではない。

八幡の妹の小町ちゃんや、平塚先生、城廻先輩、陽乃先輩、お姉ちゃんも浮かんでくる。

この人たちの姿が浮かんできて言えることはただひとつ。

今年は去年よりも特別な日である。

…ん？体育祭はどうしたって？

あれは語るには長い出来事だったからカット！

~~~~~

冬の寒い朝。

布団から出るのをためらうほどに寒い。

この布団の暖かさは布団の魔力が高い。

冬のふとんは正義。

ここは譲れません。

今日は休日だしゆっくり二度寝しますか。

布団をかぶり直して…

「おはようー」

バアンとお姉ちゃんがドアを開けて入ってきた。

「おはよう。そしておやすみ。」

「させないぜー」

バサツと私の掛け布団を奪っていく。

「ああつ、私の相棒！」

「何すんのさー！」

「いや、暇つぶし。」

「暇つぶしかよっ！」

「いや、だって私もう大学決まってるし、冬休みあとちよつとやん。」

「そうだけどさっ！もう少し私に気を使ってよ！」

「そんなもの私にない！」

「言いきりやがったぞこの姉。」

「ははは、お姉ちゃん？私、本気だしちやうよ？」

「なに言ってるんだいこの妹は。姉に勝てるわけないだろう。」

「今日こそ勝っ！」

ベットから起きてお姉ちゃんに攻撃を仕掛ける。

「先手必勝！」

「いつでも先攻が強い！」

「甘いわー！」

お姉ちゃんが奪った掛け布団を私に投げてきた。

「へぶっ！」

当然私は直撃してベットに仰向けに倒れる。

「さ・ら・に。」

じりじりとお姉ちゃんが迫ってきて…。

「くらえー！」

「あっはっはーやめてー！ちよっはっふはっ！」

くすぐってきた。

「はっはっはー！ヤバイホントにやばい。」

「あの、大きな音が聞こえたんですけど何事ですか…？」

「えっ？」

「あつ。」

八幡が家に来ていたらしく、私たちがうるさくしていたので気になって見にきたのだろう。

「ここで状況を確認しておく。」

私↓ベットに仰向けに寝てお姉ちゃんにくすぐられている。

お姉ちゃん↓私の上に乗ってくすぐっている。  
そして私たちの服装↓乱れている。

以上のことより…誤解される！

「!?失礼しましたー!」

案の定八幡は勢いよく扉を閉めて出て行ってしまった。

「…まっつてええええええ!」

私はお姉ちゃんをどかして八幡を追いかける。

「あちゃー、来てたの忘れてた。」

ドアを出たところでそんな声が聞こえた気がした。

~~~~~

何とか先ほどの状況を説明し、理解してもらった。

説明に一時間かかったよ…。

お姉ちゃん何もしてくれないし。

八幡も、

「お、おう。わかってるって。」

って感じで曖昧だったけど…。

そのあとに「愛してるのは八幡だけだよ。」って伝えたら顔真っ赤
だったなあ。

おっと、誰かに向けた説明はこれぐらいにしておこう。

今日は来週に迫ったクリスマスについての計画をしていたんだっ
た。

来週のクリスマスが丁度終業式なのでそこからどうするかって話
なんだけど…。

「いやあ、まさか…。」

「雪ノ下さんの家でパーティーするとか…。」

「規模でかいやん。」

順番に私、八幡、お姉ちゃんだ。

そう、今わかった通り陽乃先輩の家の一室を使ってパーティーをす
るとか言われたのだ。

陽乃先輩曰く、

「私も行きたいけど偉い人とかの挨拶周りがあるからさ、いつそのこと私の家ですれば解決だよね！」
だそうだ。

そんなことができてしまう陽乃先輩もなかなかですけどね。

ちなみにメンバーは今のところ八幡、私、お姉ちゃん、小町ちゃん、城廻先輩、平塚先生という感じだ。

あくまで今のところだ。

陽乃先輩は誘いたかったら誘っていいよ（私が面白いと思う人なら）と言っていた。

カツコの中はオーラが語っていた。

そんなこんなでちよつと楽しみかつ、かつてない恐怖を感じている。

絶対何かあるとしか思えない。

「絶対なんかあるよ。」

「そうだね（ですね）。」

満場一致だった。

「やっぱり、みんなで乗り越えるしかないか。」

「とりあえず、悪いことが起きないようにはしましょう。」

「危険を感じたら合図は忘れずに。せめて私たちだけでも逃げる！」

「うす。」

「うん。」

当初とは計画の方向性が違っている気がするがそんなことは気にしない。

私だって命が大切なのだ。

「よし、大体決まったところで二人に聞きたいことがあるんだけどや。」

「?」

「二人はさ……どこまで進んでるの?」

「ブフツ！」

いきなりすぎて吹き出してしまった。

「話が180度以上変わってるよ!!」

「いやあ、だって気になるじゃん。あまりそういうこと二人とも話さないし。」

「だからって今聞く?!」

「クリスマスがもうすぐだから何か二人にはあるのかなあと思っ

「理由が安直!」

「で?どこまで、どこまで?」

素直に答えるか迷っていると、

「まだ手ぐらいしか繋いでないですよ。」

八幡が答えていた。

「ほほお、まさか八幡君が答えるとは…。」

「俺だつて変わつて来ている…:とということでしょう。」

「そうかそうか、良い成長だね。:それにしても手を繋ぐぐらいかあ。」

「なにお姉ちゃん?だめなの?」

「いや全然。ペースはそれぞれだと思うし。」

「ふーん。」

「ま、このクリスマスでキスぐらいいいんじゃない?」

「ツー!」

「いや、むしろしろ。」

「フア?!」

「ええっ!」

「じゃ、言いたいこといったし遊ぼうかな。」

「そこまで言つて切り替え早い!」

「さーて、何で遊ぼうかな。」

「ちよつとお姉ちゃん!」

今年のクリスマスは予想外であることは確実だ。

第16話 私と彼らのクリスマス 中編

時が過ぎて25日。

クリスマス当日である。

午前中に終業式は終わり、のちに始まるパーティーに備えるだけである。

↓怖いなあ。

集合は5時に家の外にいてくれとのこと。

↓やっぱり怖い。

服についてはこちらで用意するから好きな格好でだそう。

↓いやな予感しかない。

しかし時間は止まることをしらない。

刻一刻と時間は迫ってくる。

ええい！ここまできたらやってやろうじゃないか！

だが、この先に待っていたことで決意はいとも簡単に崩れることになる。

~~~~~

5時

私はお姉ちゃんと一緒に外で待っていると1台の車が家の前に止まった。

明らかに高そうだよっ！

陽乃先輩が来るときはいつも歩いてるところしかみないから車がこんなのだとは思わなかった。

「ひゃっはろー！さ、乗って乗って！」

車から陽乃先輩が出てきて私たちを車に押し込むように乗せる。

陽乃先輩が出てと運転手に告げると車は走り出す。

「誰か先にきてますか？」

私が陽乃先輩に聞く。

「うん、めぐりと八幡が先にいるよ」

陽乃先輩はニヤツと笑いながら答える。

この顔は：何か仕込まれてるな。

普段はこういう顔をしない陽乃先輩だが、八幡の言っている強化外骨格が取れてきている。

こっちの陽乃先輩の方がとても似合っている。

「絶対何か企んでますね」

「まあね。それは着いてからののお楽しみってことで」

私、気になります！

と冗談は置いておいてと。

ゆらゆらと揺られながらこれこれ15分。

「ついたよ、ここが私の実家でーす！」

陽乃先輩に言われ、窓の外に視線を向けると：：でかい屋敷があった。

「でかつ！」

でかい、とにかくでかい。

家の端が見えない：だと。

だいたい門を開けて車で玄関前まで行くのおかしいでしょ!?

「ようこそー」

陽乃先輩が先に降りて私たちを迎える。

「おっ、おじやましーす：」

玄関のドアをくぐると目の前には

「いらっしやいませ」

と執事服&メイド服来た人がいた。

ん？

「八幡なにやってんの？」

というか八幡だった。

じゃあ隣は：と視線を向ける。

予想通りめぐり先輩だった。

「まあ、こうなった原因は後で話す」

「この格好はちよつと恥ずかしいね」

二人の言葉を聞きながら上がらせてもらう。



といっても靴で入っていいらしい。  
流石だね！

~~~~~

リビング？に案内され、ソファに座る。

「さて八幡。その格好の理由を教えてください」

私が八幡にさっきから疑問に思っていたことを聞く。

「あー、これはだな…」

「私が説明しよう！」

とノリノリで陽乃先輩が八幡の言葉を遮り、説明を始める。

「今日の服装は私が用意しておくって言ったよね？」

「そうですね」

「だからランダムにくじ引きとしました！」

「フア！」

まじかー！そう来ちゃいますか。

はじめからかましてくるなあ。

「まあ、無難なの引けばいい話でしょ」

とお姉ちゃんは余裕を持っている。

おいおい、そういうのフラグって言うんやで。

「ささっ、はやくこの箱から引いてよ。ちゃんと普通のもあるからさ」

陽乃先輩は私たちの前に箱を置く。

「まずは、お姉ちゃんどうぞ」

「姉に譲るなんて白もわかってるね」

いや、先に面倒な服を減らしてもらいたいです。

「んじや早速…なんか紙の枚数多い。…これだ！」

ガサゴソと箱の中に手を入れてお姉ちゃんが選んだその服とは！

『もこもこの羊パジャマ』

うーんなんというか

「この年でそれ着るのかあ」

「ぐふっ」

あつ、お姉ちゃん倒れた。
やった！初めて勝ったよ！

そんなことを思っているとお姉ちゃんはなんか黒いスーツ着たお姉さんたちに隣の部屋へ連れていかれた。

と、思ったら1分ぐらいでお姉ちゃん戻ってきた。

…ももこの羊パジャマで。

「ぶっふー！お姉ちゃん似合ってるよー！」

こりやあ傑作だ！

「一生の恥かもしれない…！」

お姉ちゃんがorzの状態で動かない。

「さてさて、次は白ちゃんの番だよー！」

くっ！来てしまった…。

もう少しこの幸福感を味わっていたかったよ…。

いや、ここでいいのを引いて勝ち組になるんや！

「行きます！私のターン、ドロー！」

手を箱の中に入れ、迷うことなく引いた。

果たしてその衣装とは！

『ももこの羊パジャマ』

「なんでさー！」

私は崩れ落ちた。

「なんで同じの入ってるんですか！」

「だって面白そうだったもの」

「そんな理由で…やり直しを要求します！」

「却下。さ、連れてって」

「まつ、待ってえ〜！」

私の抵抗もむなしくずると先ほどのお姉さんたちに連れていかれた…。

~~~~~

さて、新しい黒歴史を作った日代白こと私です。

あのあと、小町ちゃんがいらないなと思ってたら、実は『黒いスーツ』って衣装だったから混ざってたとか言う衝撃的な真実を受けたり、平塚先生が『工事現場のつなぎ』引いて似合ひすぎているのを見た。

平塚先生をほめてたら「私は男らしいのが似合うのか…」とがりしてしたが、事実なのでふれないことにした。

しかし、

「なんかさ、クリスマスだけど完全に格好がクリスマスじゃないよね」みんな頷いていた。

そして陽乃先輩の方へ一斉に視線を向ける。

「いいじゃない別に。これから先クリスマスなんて何回も過ぎるんだから一年ぐらいこんな日があっても」

「陽乃先輩はそういう人ですから…もう諦めてます」

「わかってもらえて何より。じゃ、全員揃ったところで少し早いけど乾杯しよう！」

と、いつの間にか用意されていたグラスをみんなとる。

「メリークリスマス！」

『メリークリスマス！』

陽乃先輩の合図に合わせて乾杯をする。

乾杯が終わるとタイミンクよく料理が運ばれてくる。

並べられる料理はとてもおいしそうだ。

料理が運び終わったところで陽乃先輩は家の方に出てくるといなくなってしまう。

忘れていたが陽乃先輩今日親のためにパーティーに出るんだった。

しょうがない、陽乃先輩が戻ってくるまで料理食べて待っていますか。

料理を食べつつしゃべっていたら7時になっていた。

そろそろ陽乃先輩戻ってくるかなあと思っていたら、スクリーンが降りてきた。

テレビないと思ってたらスクリーンかよ！

スクリーンに映像が写し出される。

写し出された人物は…やはり陽乃先輩だった。

「ひゃっはろー！みんな楽しんでるかな？私はまだかかるから、サブライズをさらに用意したよ！」

さぶらいずう？

これはまさか…いや！いい方面でお願いします！

「題して、『一時間限定！ケイドロ対決！』を始めます！」  
…。

『はあ!?!』

みんなで叫んでしまった。

## 第17話 私と彼らのクリスマス 後編

陽乃先輩がなんか言い出したぞ？

おっと、わからない人は前回は読んでね☆

それよりも、

「ケイドロ？」

『そうーケイドロ』』

いや、なんで映像なのに普通に返事が帰ってくるのさ。

『まあまあ細かいことは置いておくとして…。ルール説明をしよう』

私にとっては細かいくないんだけどなあ…。

『さてさて、私の決めたルールはこちらー！』

映像にルールが表示される。

簡単に説明すると、

- 1、私たちはドロボウでさっきの黒いスーツの人たちがケイサツ
- 2、誰か一人でも残れば私たちの勝利
- 3、ドロボウ・ケイサツはそれぞれ特別な手袋を装着
- 4、手袋でタッチされるとセンサーが起動して捕獲とみなされる
- 5、こちらも手袋で捕まる前にタッチした場合、二分間ケイサツその場を動けない
- 6、フィールドは家の敷地全部
- 7、制限時間は一時間

だそうだ。

手袋すごくね!?

企業秘密らしいよ！

「格好ってこのままですか？」

八幡が気になったらしく映像の陽乃先輩に話しかけていた。

『もちろん』

なっ…にいいー!?

このまま走れって？

いや、別にいいけどさ。

『その服と手袋が連動してるからね。走りにくい人もいるけどそれは

頑張つてね。そして最後に私から、そっちが勝った場合の賞品を发表するね』

賞品、ねえ…。

いったい何を用意してるんだろう？

『その賞品とは…勝つてからののお楽しみ！』

うおおい！

まさかの展開に私驚いてるよ。

めぐり先輩とお姉ちゃんは『やっぱりか…』という感じで笑つてるし、八幡と平塚先生は呆れた顔をしている。

小町ちゃんは私と同じで驚いた顔してたね。

まあ、陽乃先輩だしそんなことだろうと納得してしまう私がいる。

『賞品については期待してくれていいよ！だから頑張つてね。開始は10分後、それまでに作戦を決めておくことをおすすめするよ。それじゃ、バイバーイ』

映像が切り替わり、10分のタイムリミットが表示される。

「さて、どうしますか？」

「やはりここはいくつかのグループに別れるのがいいだろう」

私が聞くと平塚先生が答えてくれた。

「そうだねえ、確かにめぐりは走りにくいだろうし…、そしてらめぐりと小町ちゃんが隠れて過ごす、私と平塚先生が戦う、八幡君と白が逃げるのが最善かな」

「あの、俺は別に与えられた仕事をするだけなのでいいですが、先生たちは大丈夫なんですか？」

やはりそこが気になるところだ。

「そこは大丈夫、私これでも陽乃さんからいろいろ教わってるから！」

「私も大丈夫だ。自分の拳には自信がある」

「…」

ま、本人たちが良いならいいんだけど…。

「じゃ、残り時間も少ないんでめぐりさんと私は隠れますね！」

小町ちゃんともめぐり先輩は駆け足で部屋を後にする。

「白と八幡も逃げなよ。私たちは最悪始まってからでも行けるから

き」

「わかりました、頑張ってください」

「アデューー！お姉ちゃん！平塚先生！」

「私と八幡も部屋を後にする。」

「八幡どこに逃げる？」

「そうだな…とりあえず階段付近だな」

「階段付近？」

「ああ。もし誰かが来ても逃げ道がないと困るからな、階段付近なら問題なく逃げられるだろう」

「なるほど…よし、急いで向かおう！あとちよつとで始まつちゃう！」

八幡の提案により私たちは階段の方へ向かった。

~~~~~

『それじゃ！時間になったからケイドロスタート！』

スタートの合図があり、運命の勝負が始まった。

私こと日代藍は平塚先生と一緒に戦いつつ逃げるといふスタイルをとるのだ。

ミスの許されないこの感じ…イイネ！

「それじゃ先生、行きましよう！」

「ああ！」

平塚先生と一緒に扉を出ると

「…」

「…」

バツチリと待ち構えていた。

終わった…。

白よ、あとは頑張ってください。

~~~~~

『藍、静ちゃんアウト！』

どこかから陽乃先輩の声がして捕獲情報が流れる。

…というかやつぱり捕まったか。  
油断大敵だね。

「いきなり二人捕まったか」

「そうだね、まあ予想通りというか…」

私たちは階段の前で陣取りつつ、周りに気を配る。

助けることもできるけど…それはまだ早いかな。

「ところでさ、八幡」

「なんだ？」

「賞品ってなんだと思う？」

「そうだな…あの人のことだからそれなりにいいもの用意してるんじゃないか？…最も、勝たせる気ないだろうけど」

「だよね…」

あの人なら勝たせる気は持ってないだろう。

（おっと、話はここまでだ）

（どうしたの？）

（下の方から足音がする。おそらくケイサツだろう）

（確かに残ってる人から考えたらそうなるね）

（静かに上に行くぞ）

（うん）

私たちは小声で会話しつつ上の階へ逃げる。

足音に気をつけながら階段を上りきる。

（上の階も造りは変わらないね）

（だな、とりあえず逃げ道を確保しとこう）

~~~~~

なんて感じで行動していたら30分ほどが過ぎ、私たちは未だに捕まらないでいる。

何となく、逃がされてるって感じるけど…。

「あと30分弱か…」

「なんか仕掛けて来そうじゃない？」

「かもな。何せあの人だし」

いたずらが生き甲斐みたいだもんね、陽乃先輩は。

『さてさて、いかがお過ごしかな？残りの四人！』

何処からか聞こえてくる放送。

仕掛けてきたか！

『いままでは軽く遊んでいたけどここからは本気の本気、四人まとめてゲームオーバーにしてあげる』

その言葉で放送は終わる。

「八幡、本気出すらしいよ」

「ああ、…というか、来てるな」

八幡に言われ、後ろを振り向くと…来てるー！

すぐさまダツシユ！

幸い一階にいたので外に出る。

靴は元々履いたままなので何も問題なし！

外に出るとある一角が照らされていた。

そう、お分かりかと思うが我等ドロボウが捕まったときの牢屋もと

い赤色のシートがひいてあった。

そしてよくよく目を凝らせば二人の影がある。

…というかあの二人お茶飲んでるんだけど。

ほっこりしてるよ、こちとらまだ逃げてるのに。

いや、とりあえず逃げるのが先だ。

私たちは追われながら建物の陰に隠れる。

「もう少し耐えてくれ」

「う、うん」

そうしたいんだけど…。

「ん、大丈夫だな」

「はちまつ…ん」

「ん？」

「ち、ちかいよ…恥ずかしい…」

「っ！わ、悪い…」

はあ、とても恥ずかしかった。

八幡の顔がすぐそこにあるんだもの。
流石の私でも恥ずかしいよ。

八幡も恥ずかしかったらしく顔を背けている。

「おや、二人ともどうしたんだい？こんなところで」

「っ！お前は…」

「葉山くん？」

この何とも言えない空気を壊してくれたのは葉山くんだった。

「私たちは陽乃先輩の遊びに巻き込まれているところなんだけど…」

「そうなのか、大変だね」

「そういうお前はどうしたんだ？」

「まあ、家庭の事情ってやつだよ。今は抜けさせてもらってるけどね」

「なるほど」

「大変だな、家がそれなりに大きいと」

「ああ、全くだよ」

おっと、そろそろ行かないとまずい。

捕まるのだけは避けたい。

「ごめん葉山くん、私たちそろそろ…」

「ああ、ごめんごめん。じゃあ二人とも、ケイドロ頑張ってくれ」

「うん」

「おう」

私たちは葉山くんに挨拶をして逃げようとする。

ここでふと疑問があった。

そう、私たちは一言もケイドロだなんて言っていない。

ということはまさか！…と思って振り向くと

「すまない」

というのが聞こえると同時にタッチされた。

~~~~~

「あゝあ、捕まっちゃった」

「しよすがねえよ、葉山の方が一枚上手だったんだ」

「はは、すまない。どうしても捕まえなければいけないかったんだ」  
私と八幡は牢屋につれてこられ、今は座っている。

「あとは、二人が逃げ切るのを待つしかないかな」  
「かもな」

あるいは助けに来てくれれば…だけどね。

「おうおう、白さんや捕まってるのかい」

「最初に捕まったお姉ちゃんが言うことですかねえ…」

「うっ…、それはそれこれはこれ」

「なんて凶々しい」

さっつきまでお茶飲んでたくせに！

「それにしても残り10分か…」

「あの二人ならなんとかなるんじゃない？」

「うーん、八幡はどう思う？」

「可能性はあると思うが、半々ってところじゃないか？」

「だよねえ」

やはりそう考えるのが普通である。

「ま、気長に待つしかないだろう」

「だね」

返事をしつつ私はお茶を飲む。

はあく、お茶が美味しい。

あ、おかわりいいですかね。

ありがとうございます。

こうして2杯目のお茶が飲み終わる頃、そして残り時間が5分を切った瞬間にその時は訪れた。

建物の中からもなんと！めぐり先輩がこちらに向かって走り出てきた。

なんとも可愛らしい走りです。

その後ろにはスーツを着たケイサツが追いかけていた。

頑張ってくださいめぐり先輩！

「手を伸ばしててえ〜！」

「わかりました！」

言われた通りに手を伸ばす。

その距離約30メートル。

残り25…20…つああ!

あとちよつとのところで追いかけられていた人にタッチされてしまった。

「ご、ごめんね?」

「いえ、私たちは先に捕まっていますし助けに来てもらえたただけでも嬉しいです」

めぐり先輩は連れてこられながら私たちに謝っていた。とても心が痛くなる。

そうなるに残りは小町ちゃんだけか…。

「いや、これは…」

「え?」

後ろ向きな考えをしていた私の隣で、八幡はよくわからないことを呟いた。

そしてめぐり先輩が牢屋に入る瞬間、めぐり先輩を捕まえたケイサツは別のケイサツの人に向かって走り出した。

何が起きたかわからない中、今度はめぐり先輩が私と八幡にタッチをした。

「解除!」

「えっ、えっ?」

「逃げるぞ、白」

「どゆことなの、八幡」

「説明は後だ。今は走れ!」

言われた通り走り始める私。

周りを見ればさっきのケイサツが次々とケイサツにタッチしている。

さらにめぐり先輩はお姉ちゃんと平塚先生にタッチしていた。

私は結論にたどりつかないまま逃げていたら

『終了!』

という終わりの合図が放送された。

~~~~~

「いや〜これは驚いたよ！まさかそうくるとはね〜」

陽乃先輩が開口一番に言う。

「あの…どういうことですか？私にはさっぱり…」

「あ、それについては白に同感」

「私もわからんな」

お姉ちゃんと平塚先生もわからなかったらしい。

「ふくん、じゃあわかってる比企谷君に説明してもらおうかな」

「なんで俺が…別にいいですけど。まず始めに城廻先輩は捕まっていますか？」

「ええっ!？」

「どうということかな？」

「城廻先輩を捕まえたケイサツとは…」

「私です！」

八幡の声を遮り出てきたのはさっきのケイサツの人だ。

「ちよつと小町ちゃん？俺の説明遮るとかひどくない？」

「お兄ちゃんだから仕方ないよ！」

「お、おう…」

「小町ちゃんなの？だって髪の色が…」

「ああ、これは…よいしょと、ウィツグですよ！」

「…」

言葉出てこない。

まさか騙されていたなんて…。

「つまりこういうことです。小町は城廻先輩を追いかけて牢屋に近づきつつタツチをする。牢屋につれていくけどまだ捕まっていない。そのため城廻先輩は俺たちを助けて、小町は周りのケイサツの動きを止めたんです」

なるほど、私たちにもわからないことをやっていたのか。

でもさ…。

「でもさ、隠れてても勝てたよね」

私は気になったので聞いてみた。

「そうなんですけど…、エンターテイメントしての小町かな、と思いまして」

「その為だけに？」

「はい！」

なかなかの思考をお持ちのかたですね。

今の今までわからなかったよ。

「で、私たちケイサツが負けたので賞品を渡したいと思います！」
「！！！！」

陽乃先輩の言葉を聞いた瞬間にみんなの目の色が変わる。

まあ…私もだけど。

「それじゃ、まず始めに静ちゃんから」

「陽乃、静ちゃんはやめるんだ」

「努力しますよー。さて静ちゃんにはこれ！」

「こ、これは私の欲しかった絶版漫画の全巻セット！ほんとにいいのか?!」

「勝ったからね。私だってそのぐらいのことはするよ」

「どうやら平塚先生は満足したらしい。」

「続いて藍にはこれ」

「これは、欲しかった格ゲーソフトに新しい新型ハードまで！」

「満足してもらえたかな？」

「ええ！」

お姉ちゃん、それが欲しかったのか…。

「というか私、練習相手にさせられるんじゃない…。」

「続いてめぐりには…はい！」

「ありがとうございます。コートとっても嬉しいです」

コートかあ、私も欲しいな。

「小町ちゃんにはこの」

「し、白物家電だあ！しかも洗濯機って…いいんですか？」

「いいのいいの！MVPだから！」

洗濯機って結構高いよね。

それ渡せる陽乃先輩ってやっぱり…。

「さてさて残る二人のうちまずは比企谷君から」

「ありがとうございます。MAXコーヒーですね!」

「いや、そうなんだけどさ…先に言われると渡しにくいなあ」

と言って渡したのはやはりMAXコーヒー。

しかしこれは

「一年分ですか」

「あつたり〜。それぐらいしか思い付かなかったんだ」

一年分か…糖分すごそうだね。

「最後に白ちゃんに…はい!」

「ありがとうございます。これは…」

手渡されたものを見るとそこには!

「八幡にお願い券?」

「そう!この券は八幡にお願い事ができるのだ!」

十枚入っていたこの券。

嬉しいけど…。

「八幡、これ知ってた?」

八幡に許可をとってなければもらえるものでは無いだろう。

「ああ、事前に聞いたよ。どうしても言うし…まあ白が満足してくれればいいかと」

「そうなんだ。なら、ありがたくいただきます」

「うんうん。賞品も渡したことだし…みんなでお風呂いこつか!もちろん男女別だよ!」

だよね!一瞬ビツクリしたよ。

~~~~~

お風呂から上がり私たちは、陽乃先輩の家に泊まることになった。

お風呂から出たときにパジャマが用意されてた時点で察したよ。

あとは寝るだけなのだが、私はちよいと八幡に用事があったので、

みんなに先に行ってもらって八幡を待っていた。

10分ぐらいすると八幡が出てきたので声をかける。

「八幡」

「おお、白か。どうした？」

「八幡に渡したいものがあつて待ってたの」

「そうなのか。待たせて悪かったな」

「いいのいいの！言つてなかったし。それじゃあ、はい！メリークリスマス」

「ありがとうございます。なら俺も…ほい」

「もらつていいの?!」

「そのために買ったからな。むしろ受け取ってもらえないと困る」

「ありがと！開けていい?」

「ああ。俺も開けるぞ」

「うん」

きれいに包まれた包装紙を取ると出てきたのは…マフラーだった。

そして八幡にあげたものは…

「マフラーか」

「そうだよ。同じだね」

私が欲しいものを送ろうつて考えてたら選んだのがマフラーだったのだ。

まさか本当にプレゼントされるなんて思わなかった。

「ありがとう八幡」

「まさか同じとはな…それでよかったか?」

「うん！これがいいの!」

「ならいい」

それと、私にはもうひとつやることがあるのだ。

「それと…ね、八幡。お願いがあるんだけど…」

私はさっきもらった券の1枚を差し出しつつお願いする。

「お、おお…さっそくか。なんだ?」

「あ、あのね…」

勇気を振り絞れ私!



「き、ききキス、をしてくれ…ないかな」

「なっ…!?!」

「ダメかな…? 今までしたことなかったから…」

「いや、ダメではないんだが…その、恥ずいな…」

「そう…」

やっぱりダメかな。

「…まあ、これがあるからな。…目を瞑ってくれ」

「…うん」

言われた通りに目を瞑る。

覚悟はできている。いつでもいいよ!

「んっ」

それは一瞬だったけども唇に確かな感触があった。

目を開けると目の前には顔を真っ赤にした八幡の顔があった。

「あ、ありがと八幡…」

「…ん」

「それじゃ、おやすみ!」

「ああ、おやすみ」

私は駆け足で部屋に向かう。

今日は寝れなさそうだよ…。

実はその後…その券は使われることなくお願いを聞いてもらった  
いたので、これが最初で最後の券になっていたとさ。

## 第18話 私と彼の始まりの場所

元旦

それは一年の始まりである。

子供のうちはとても嬉しいことばかりが起きるこの日であり、私はとても気に入っている。

しかし…寒い。

目が覚めたはいいがとても布団から出たくない。

でもなあ、待ち合わせあるし…。

と、何度かの葛藤の末に私は布団から出る。

顔を洗ってリビングに行く。

「明けましておめでとう、お姉ちゃん」

「あけおめ、妹よ」

「母上&お父さんは？」

「大晦日からそば打ちに行ったらしいよ。今日の夜には帰ってくる」

ほお、そーいやそーうだった。

「それよりも白、忘れてないよね？」

「覚えてるよ！10時半に神社でしょ？」

「うん」

現在時刻は8時。

まだ余裕だ。

新年からみんなに会えるのはいいことだよね。

そんなことを考えつつ私は椅子に座り、お姉ちゃんが食べていたおせちを一緒に食べる。

おせちを食べ終えた私は、待ち合わせの為に準備を始める。

私は初詣に行くのだ。

振り袖とかそういうのは着ないので、格好はラフな感じで行こうと思う。

やはり冬のパーカーは安定だよね！

なんて思いつつも準備を終える。

ガチャッとドアを開けると丁度お姉ちゃんもドアを開けて出てき

た。

「おいおいマイシスター、元旦からパーカーとかあれやん。女子なんだからおしやれしやうぜ」

「おいおいマイシスター、ブーメランって知ってる？お姉ちゃんこそ女子なんだからおしやれしやうぜ」

目が合ったとたんブーメラン投げてきた。

お姉ちゃんだってパーカーやん。

「私は明日から本気だすの」

「それ永遠に來ないやつ」

「あちゃー！ばれたわ」

「まったく…」

お姉ちゃん、新年から変わらないなあ。

…私もだけど。

「…白！そろそろでないとマズイ！」

「うわっ！ほんとだ！」

時計を見ると結構ギリギリだった。

ゆっくりし過ぎたな。

私たちはコートを着て外へ出る。

うーん、寒い！

「白、これ」

「おお、ありがとうお姉ちゃん」

お姉ちゃんがマフラーを渡してくれたので遠慮なく受けとる。

ちよつとばかり急ぎながら神社に向かう。

途中信号に捕まったりしたが、なんとか待ち合わせまでに神社につくことができた。

「白さん、藍さん、こっちです〜！」

呼ばれた方を振り向くと、小町ちゃんと八幡がいた。

「明けましておめでとう」

「おめでとさん」

「おめでとうございます！」

「みんなあけおめ〜」

私、八幡、小町ちゃん、お姉ちゃんの順にお正月定番の挨拶をする。

「とりあえず並ぼつか」

「「そうだね（ですな）」」

お姉ちゃんの一声でみんなに参拝の列に並ぶ。

やはり元旦だからそれなりに列が長い。

私たちは今年の抱負とか、テレビの話をしながら列が進むのを待った。

しばらくして私たちの順番が回ってくる。

私はあまりこういうのに詳しくないので、前の人を見てそれに習った。

そして願うことはただひとつ。

今年も、八幡の隣にすることができますように…と。

初詣が終われば、やることなどあまりないと思う。

強いていうならおみくじを引くぐらいかな。

というか引いたよ…。

結果は簡単。

小町ちゃん、お姉ちゃん↓大吉

私↓小吉

八幡↓末吉

…。

ま、いいよ。

結果は気にしない気にしない。

おみくじを引いたあと、お姉ちゃんと小町ちゃんは私たちに気を使ったのか、先に帰っていった。

別にそんなことしなくてもいいんだけどなあ。

けど、八幡に用はあったので、私は八幡の方を向く。

「八幡、ちょっといいかな」

「なんだ？」

「よりたいたいところがあつてさ」

「おお、わかった」

了解を得たので私はある場所に向かう。  
目的地はさほど遠くない。  
駅を過ぎ数分、私たちは目的地の場所につく。

「ここだよ」

「ここって…」

「そう、ここは私と八幡のきっかけの場所」

そう、目的地であるこの路地裏は私が八幡を知ることとなった場所だ。

「私はここで初めて八幡のことを知った。八幡だと知ったのはもう少しあとだけだね」

といいながら私は笑う。

「もう一年か…」

「うん…時間が経つのは早いね」

私たちは少しの間無言で路地裏を見つめる。

「でもまあ…お前に出会うきっかけになって、よかった」

八幡は頭を掻き、頬を赤色に染めながら言った。

「うん、ありがとう」

「おう」

「…じゃ、そろそろ帰ろっか」

「そうだな」

「あの…!」

不意に後ろから声をかけられる。

声のした方を向くと、一人の男性が立っていた。

「突然すみません。…比企谷さんですか?」

「?はい、俺がそうですが…あなたは?」

八幡が答えると男性は確信をしたのか、引き締まった顔になる。

「私は、一年前にここであなたに助けてもらった者です」

「えっ」

驚いた。

「今日、もしかしたらと思ってここに来たのですが…会えてよかったです」

と、男性は八幡に言う。

「あれは、俺だけの力ではないです。隣にいる、白がいてくれたからこそできたことです」

「そうなんですか！ありがとうございます！」

「っ、いえいえ、無事でよかったです！」

私にいきなり話題が来たので、焦りながら返事をする。そのあとにくっか言葉を交わしたあと、男性は去っていった。

「驚いたね」

「ああ、まさかこんなに色々重なるなんてな」

## 第19話 私たちの新たな始まり

青春とは嘘であり悪である。

私のよく知る人がかつて言っていた言葉である。

彼曰く、青春を謳歌する人達は自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境を肯定的に捉えていると。

そしてなにか失敗したとしても、その失敗すら青春の証としてしまおうと言った。

確かに、自分の立場を得るために物事を大げさに言ったり、共感できないうのに共感したふりをする。

私も過去にそんな経験があった。

私は、そんな偽りの自分が『偽物』であると思う。

そんなものはいつかは崩れてしまう脆い関係となる。

しかし現在の私は彼に出会ってから、以前の私と違って変わった。

偽ることをやめ、自分に正直に生きた（はずである）。

彼に近づき、私は『偽物』でない『本物』の自分を探しだすことができたと感じる。

そのお陰で私は、強く、硬い関係となる人と出会うことができた。

私を変えるきっかけとなった彼、比企谷八幡に私は感謝している。

最後に、私は例えどんなことが起きても、彼のことは信じ、助けたいと思う。

~~~~~

「呼び出された理由はわかってるな？」

「いえさっぱり」

「この作文だ！この！」

私の前にいる平塚先生は机をバンバン叩きながら怒りを私に向けてる。

私はどうやらこの作文のせいで職員室に呼び出されたらしい。

「この作文はあれですね。『高校生活を振り返って』っていうテーマ

の」

「そうだ。なのに…私をおちよくっているのか？」

「いえ全然。私は真面目に書きましたよ。私の高校生活は八幡によるところが大きかったからこうなっただけです」

「…そうか、それならそれで良いがな…。もう少し普通に書けなかったのか？」

「別に書くことはいいんですけど…。私は書きたいものを書きたいんです！」

「…まあいい。それより、今日呼んだのにはもうひとつ用件がある」

「もうひとつあるんですか…」

「嫌そうな顔をするな。この件についてはもう一人呼んでいる」

「もう一人？」

「ああ…おつ、来た来た」

後ろを振り向くと、平塚先生呼び出されたあわれな犠牲者…もとい八幡。

「八幡」

「おう、白も平塚先生に呼ばれたのか？」

「うん」

そして私たちは呼び出した本人に向き直る。

「さて、君たち二人には1つ頼みがあつてね。奉仕部という部活に参加してほしい」

「奉仕部？」

「とはいったい？」

「それについてはあとで説明しよう。とりあえずついてきたまえ」

平塚先生は職員室を出て何処かに向かう。

私たちは平塚先生についていくしかないのです、平塚先生の背中を追う。

~~~~~

教室棟を抜けて渡り廊下を歩く。

すると特別棟のある教室の前で平塚先生は止まる。



「ここだ」

平塚先生は戸を開ける。

「平塚先生、ノックを」

扉の向こうには一人の女生徒がいた。

陽乃先輩の妹であり、国際教養科二年J組の雪ノ下雪乃である。

あの雪ノ下陽乃の妹である。

本から視線を外し、こちらに視線を向けてくる。

「そちらは…2年E組日代白さんと2年F組比企谷八幡君ね」

「よく知ってるね？」

「あなたたちは有名なもの。それに…姉さんの近くにいるから」  
最後の方はかろうじて聞こえた。

やはり陽乃先輩の知り合いだからというのもあるらしい。

「それで平塚先生、何か用ですか？」

「ああ、それについてだが、この二人を入部させる。だからそれを伝えにきた」

えっ、私たちはまだ入るなんていつてないんだけど！

「平塚先生、私たちはまだ入部するとは言ってませんが？」

「おお、そうだった。どうだ、奉仕部に入ってくれるか？」

チラツと八幡の方を向く。

八幡はため息を吐き、肩をすくめる。

「俺はかまいませんが」

「なら私も大丈夫です」

二人して答える。

「そうかそうか！流石君たちだ！では、私は戻る。部の内容については雪ノ下から聞くように」

そう言って平塚先生は教室から出ていく。

戸が閉められ、教室に3人が残される。

「とりあえず座ったら？」

雪ノ下さんは積み上げられている椅子に目を向けながら言う。

私と八幡はテキストに椅子を降ろして座る。

「さて、ようこそ奉仕部へ。私は雪ノ下雪乃よ」

「一応自己紹介をしておこう。比企谷八幡だ」

「日代白です」

「あなたたち、まだこの部については知らないのよね？」

「ああ」

「うん」

「なら、ゲームをしましょう」

「ゲーム？」

「そうよ。この奉仕部がどのように活動しているか、それを当ててちょうだい」

うーん、奉仕部がどのように活動しているか…ねえ。

よし。

「ちよつといかがわしい感じの…」

「やめい」

「あたっ」

ふざけていたら八幡に止められてしまった。

雪ノ下さんも「なに言ってるんだこの人」みたいな目で見ている。

「はあ…。あなたまさか本気で言っているわけではないでしょうね？」

「まさかく、もちろん冗談☆」

「そう、でもこれでああなたの回答権は無くなったわ」

雪ノ下さんは八幡へ視線を向け、早くしろという目線を送る。

「まあ、普通に考えて依頼者が持ってきた依頼を解決するっていうのじゃないか？」

少し考えるしぐさをして、最もらしい答えをした八幡。

さあ、雪ノ下さんの判定は!?

「比企谷君の回答ではギリギリ及第点というところかしら」  
「どうやら少し違ったようだ。」

「じゃあ雪ノ下さん、正解は?」

「依頼者の持ってきた依頼を解決するのは正解よ。でも、ただ解決するのではないの。例えるならそうね…魚を欲しいと依頼してきた人がいたとしたら、魚をあげるのではなく魚の取り方を教えるという感

じよ」

「つまり、ただ依頼を解決するのではなく、解決の手口を教えるってことか」

なるほどなるほど。

奉仕部はそんなことしているのか。

「活動内容はわかったけどさ、暇なときは何してるの？」

「好きにしていればいいわ。本を読むでも、遊んでいるでも、勉強をしているでも」

「りよーかい、好きなようにしていればいいのね」

「椅子が必要ならあそこから取って」

教室の後ろに積み上げてある椅子を取り、私たちは適当なところに座る。

座ったのはいいが私たちはすることがなくただしゃべっていた。

30分ほどたったとき、不意にガラツと扉が開く。

入ってきたのは平塚先生だった。

「どうだ？しつかりやっているかね」

「平塚先生、ノックを」

「悪い悪い。で、しつかりやっているかね？」

雪ノ下さんは本から顔をあげる。

「別に問題ないと思います。二人とも騒ぐタイプではないので」

「そうかそうか、上手くやっているようで何より。さて時間も時間だ、今日はもう帰りましたまえ」

「「わかりました」」

帰りの準備をして部室の外に出る。

雪ノ下さんは部室の鍵を閉めて平塚先生に渡す。

「では気を付けるように」

「はい」

「うす」

私たちは昇降口に向かい歩きだす。

「そーいえばさ、雪ノ下さん」

「なにかしら？」

「連絡先教えて！休むときとかあるし」

「わかったわ。比企谷君も教えてもらって良いかしら」

「りょーかい。白、任せた」

「うん」

八幡は私に携帯を渡す。

私は、手早く雪ノ下さんと交換を済ませた。

「これでいいわね。じゃあ、私はこっちだから。さようなら」

「またね」

「じゃあな」

雪ノ下さんは靴を履き替え先に帰っていく。

「俺たちも早く帰ろう」

「そうだね」

私たちも靴を履き替え校門を出る。

「それにしても、クラス別れたね」

「そうだな。こればかりは仕方ないとしたか言えない」

そう、私と八幡はクラスが別れてしまった。

私がE組、八幡はF組だ。

さらにいえば、1年の時のグループで八幡と戸塚くんがF組に私を含めた残りのメンバーがE組となった。

「別に気にしてないんだけどね。こうして一緒に帰れるし」

「そうだな」

クラスが離れてしまっても、毎日会えるのだ。

別に気にするほどでもない。

「白、今日うちに食べに来ないか？藍さんも白さえよければそうするって小町が言ってたんだが…」

「うん、久しぶりにそうしようかな」

「わかった。小町に伝えておく」

こうして私たちの新たな学校生活が始まった。

今年はきつと良い年であってほしいな。